

第 143 回埋蔵文化財セミナー

弥生時代の住宅事情

— 弥生人の住まいの実像に迫る —

◇ 報告 1 「弥生時代後期の屋外排水溝を備える竪穴住居
— 八幡市美濃山遺跡を中心に —

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
川上 晃生 調査員 ・ 中川和哉 課長補佐

◇ 報告 2 「河内弥生人の住まいに迫る — 大阪府八尾南遺跡の竪穴住居 —

茨木市教育委員会
正岡 大実 発掘調査員

◆ 講演 「弥生～古墳時代移行期の集落と社会」

同志社大学歴史資料館
若林 邦彦 教授

日時 令和 2 年 2 月 15 日 (土)
午後 1 時 30 分 ~ 午後 4 時 30 分

場所 イオンモール KYOTO 4 階 Koto ホール

主催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

弥生時代後期の屋外排水溝を備える竪穴住居

－ 八幡市美濃山遺跡を中心に －

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

川上 晃生・中川 和哉

1. はじめに

八幡市美濃山遺跡は、生駒山地から派生する美濃山丘陵の北端に位置する集落遺跡で、標高は約52mです。これまで9回にわたる調査が行われ、弥生時代後期と飛鳥時代から奈良時代にかけての集落であることが分かっています。

美濃山遺跡で特徴的にみられる屋外排水溝を備える竪穴住居は、住居内の出土遺物などから弥生時代後期と考えられます。これまでに美濃山廃寺下層遺跡や宮ノ背遺跡、西ノ口遺跡、南山遺跡でも確認されています。ここでは、美濃山丘陵と同じ生駒山地から派生している北河内地域(大阪府北部)の枚方丘陵や長尾丘陵で確認されている事例も取り上げながら、屋外排水溝をもつ竪穴住居やその集落についてみていきたいと思います。

2. 美濃山丘陵の弥生時代

美濃山丘陵では、後期旧石器時代や縄文時代草創期の石器も確認されていますが、本格的に居住地として利用されたのは弥生時代になってからです。以下、美濃山丘陵の弥生時代について概観します(図1)。

弥生時代前期の遺跡は、現在のところ確認されていませんが、弥生時代中期になると遺跡数が増加し、土器や石器、方形周溝墓などが確認されています。

弥生時代後期にはさらに増え、集落遺跡として宮ノ背遺跡・西ノ口遺跡・備前遺跡・南山遺跡・幣原遺跡・美濃山廃寺下層遺跡・美濃山遺跡などが営まれました。これらの遺跡は、平野を望む丘陵頂部に位置しています。また、先に紹介した美濃山廃寺下層遺跡や宮ノ背遺跡、西ノ口遺跡、南山遺跡では屋外排水溝をもつ竪穴住居が確認されています。ただし、広範囲に調査をした遺跡が少なく、集落全体から屋外排水溝を考える良好な事例がありませんでした。しかし、美濃山遺跡では広範囲に調査をした結果、集落の様相が明らかになってきました。

このように、美濃山丘陵一帯では、弥生時代中期から後期にかけての集落遺跡が展開しており、人々の居住空間として利用されていたことがわかります。なお、男山丘陵の式部

谷遺跡では、宅地造成工事中に突線紐式袈裟襷文銅鐸が出土しています。

3. 美濃山遺跡でみつかった竪穴住居と出土遺物

美濃山遺跡では、これまでの発掘調査で弥生時代後期の竪穴住居が合わせて19基確認され、そのうち13基が屋外排水溝を備えています(図2)。調査の結果、屋外排水溝の多くは標高の低い谷間に向かって延びていることがわかりました。先に触れたように、これまでの調査では屋外排水溝は確認されていたものの、調査範囲が狭く詳細は不明でしたが、今回の美濃山遺跡の調査によって、屋外排水溝をもつ住居が含まれる集落のようすが分かってきました。また、集落を取り囲む環濠のような施設も見られません。以下、美濃山遺跡の調査で確認した住居の形態や出土遺物についてみていきます。

竪穴住居数：円形住居7基・多角形住居2基・方形住居9基・不明1基 計19基

竪穴住居は、重複関係などから同じ場所で建て替えられており、その際に住居の形態や床面積が変化していたことがわかりました(図3)。竪穴住居11では、屋外排水溝に意図的に土器が廃棄されていることが確認され(図4)、住居の廃絶に伴って何らかの祭祀が行われたことが想定されます。

屋外排水溝の特徴：屋外排水溝を備える竪穴住居は円形住居が6基、方形住居が5基、多角形住居が1基、形態不明の住居1基です。屋外排水溝の位置は、住居の形態によって違いがあり、円形や多角形の竪穴住居では、中央土坑から延びている例や、周壁溝から延びている例があります。方形の竪穴住居では、住居のコーナー部から屋外排水溝が延びています。屋外排水溝の規模は、幅30~70cm、深さ30~70cmで、長さは竪穴住居11・12のように直線距離にして30~45mに達するものもあります。長大な屋外排水溝が見られることは美濃山遺跡の大きな特徴の1つと言えます。

大阪府八尾市八尾南遺跡や京都市大藪遺跡、奈良県御所市中西遺跡などでは竪穴住居からトンネル状に掘り抜いた屋外排水溝や排水溝に木樋が埋め込まれる例があります(図5)。しかし、美濃山遺跡では、そのような例は確認されませんでした。

主要遺物(弥生土器)：壺(広口壺)・甕・鉢・有孔鉢・高杯・器台・手焙形土器

美濃山遺跡や美濃山廃寺下層遺跡では、住居内や屋外排水溝から土器が出土しています。土器の形態などから弥生時代後期と考えられます。弥生時代中期頃の土器や古墳時代前期の土器が確認されていないことから弥生時代後期を中心とする集落であったと考えられます。ただし、出土した土器は、現在整理中のため、遺跡内での住居の変遷までは明らかにできていません。

弥生土器の他に石鏃や砥石や台石、用途不明の石器が出土していますが、磨製石斧は極

めて少なく、^{いしぼうちよう}石庖丁等の農具類は確認されていません。したがって、遺物の点からどのような農耕(または生業)を行っていたのか明らかにはなっていません。

4. 北河内地域にみられる類似遺跡との比較検討

美濃山遺跡の南西側に位置する北河内地域は、大阪府の北東部に位置し、淀川と生駒山系に挟まれた淀川左岸地域にあたります。弥生時代後期になると北河内地域でも遺跡数が増加し、^{でやしき}出屋敷遺跡・^{ふじさかひがし}藤阪東遺跡・^{たかつかやま}鷹塚山遺跡・^{やまのうえてんどう}山之上天堂遺跡・^{ねやみなみ}寝屋南遺跡などが出現し、これらの遺跡でも屋外排水溝をもった住居が確認されています(図1)。以下、良好な資料が得られた遺跡を比較対象として取り上げます(図6)。

○藤阪東遺跡(『藤阪東遺跡発掘調査概要報告』1990)

立地：標高約55～60m

竪穴住居数：円形住居2基・多角形住居2基・方形住居17基 計21基

主要遺物(土器)：壺(広口壺)・甕・鉢・有孔鉢・高杯・器台・手焙形土器

屋外排水溝の特徴：屋外排水溝は21基の竪穴住居のうち20基で確認されました。円形の竪穴住居の屋外排水溝は、後世の掘削を受けていて詳細は不明です。方形の竪穴住居の屋外排水溝は、コーナー部より延びるものと住居の一辺の中央部から延びるものがあります。多角形の竪穴住居は3期(A～C期)にわたって建て替えが行われており、A期・B期は中央ピットから屋外排水溝が延びていますが、C期になると中央ピットから屋外排水溝に続く溝が意図的に埋められ、周壁溝から谷に向かって延びています。また、住居から延びる屋外排水溝のいくつかは、調査地北部を東西方向に延びる基幹排水溝ともいべき溝に接続しています。これらの屋外排水溝は、基幹排水溝も含めて大半が、地形が低くなっていると思われる西に延びており、1棟のみが谷地形のある南へ延びています。

○寝屋南遺跡(『寝屋南遺跡』2009)

立地：標高約50m

竪穴住居数：方形住居9基

主要遺物(土器)：壺(広口壺)・甕・鉢・高杯・器台・手焙形土器

屋外排水溝の特徴：屋外排水溝が残っているのは9基の住居のうち2基です。屋外排水溝は周壁溝から延びており、住居のコーナー部から延びるものと住居の一辺の中央部から延びるものがそれぞれ1棟ずつあります。確認された屋外排水溝は、丘陵の斜面に向かって延びています。他の住居については遺存状態が良好ではなく、屋外排水溝の有無は不明です。竪穴住居は出土した土器から3期に区分され、それぞれの時期の居住単位は3～4基と想定されています。

5. まとめにかえて

今回、美濃山遺跡をはじめとする屋外排水溝を備えた竪穴住居についてみてきました。

屋外排水溝をもつ住居は、美濃山丘陵のみならず、生駒山地から派生した丘陵の広がる北河内地域にも多く見られました。また、八尾南遺跡の所在する中河内地域や同志社大学京田辺校地内にある田辺天神山遺跡の所在する南山城地域、さらに和泉地域、大和地域など近畿圏域に点々と分布しています。これらの遺跡の多くは、標高50m前後、あるいは比高が30～50mの丘陵上にあり、立地がよく似ています。しかし、美濃山遺跡や美濃山廃寺下層遺跡、藤阪東遺跡のように1つの遺跡で屋外排水溝を備えた住居がまとまって確認されている例は他にありません。

特に美濃山遺跡では、多数の竪穴住居に屋外排水溝が見られました。見つかった屋外排水溝は、藤阪東遺跡も同様ですが、集落の中央から周辺の地形の低いところや谷間に向かって延びています。また、屋外排水溝は、すべての竪穴住居にみられないため、その特殊な構造から石器や鉄器などを製作した工房跡の可能性も考えられます。しかし、美濃山遺跡や藤阪東遺跡の竪穴住居では、石器や鉄器などを製作していた痕跡は確認されていません。さらに、出土した土器の様相がよく似ていることから、屋外排水溝を設けた竪穴住居を含む集落に暮らしていた人々は、同じような生活様式を共有する、つまり同じ文化圏に属していたことがうかがえます。

今後、同様の例について広い範囲で資料収集をしたいと思います。

【主要参考文献】

安東広道 2011「集落構成と社会」『講座日本に考古学6 弥生時代(下)』

大阪府立弥生文化博物館編 2001『弥生時代の集落』 学生社

大塚初重・白石太一郎・西谷正・町田章編 1996『考古学による日本歴史15-家族と住まい-』 雄山閣

小野忠熙 1984『高地性集落論-その研究の歩み-』 学生社

小野忠熙 1986『日本考古地理学研究』 大明堂

金関恕・佐原眞編 1988『弥生文化の研究2 生業』 雄山閣

金関恕・佐原眞編 1993『弥生文化の研究7 弥生集落』 雄山閣

潮見浩 1987「鉄・鉄器の生産」『岩波講座日本考古学3 生産と流通-』

下條信行編 1989『弥生農村の誕生』 古代史復元4 講談社

下村節子ほか 2009『図録考古資料でみる枚方の歴史』 財団法人枚方市文化財研究調査会

寺澤薫・森岡秀人編 1990『弥生土器の様式と編年-近畿編II-』 木耳社

西田敏秀・荒木幸治 2000「淀川左岸地域における弥生集落の動向」『みずほ』 第32号

- 濱田延充 2012「河内・和泉の弥生集落－実態の解明に向けて－」『近畿弥生の会企画シンポジウム「弥生時代集落の実像と動態を探る」発表要旨集』 近畿弥生の会
- 浜田晋介 2018『弥生文化読本－学史から読む研究のあゆみ－』 六一書房
- 村川行弘・小林博 1995『弥生時代の大阪湾沿岸』河内地域史・弥生編 大阪経済法科大学出版部
- 文化庁・奈文研編 2016『定本発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』 同成社
- 宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』 中央公論美術出版

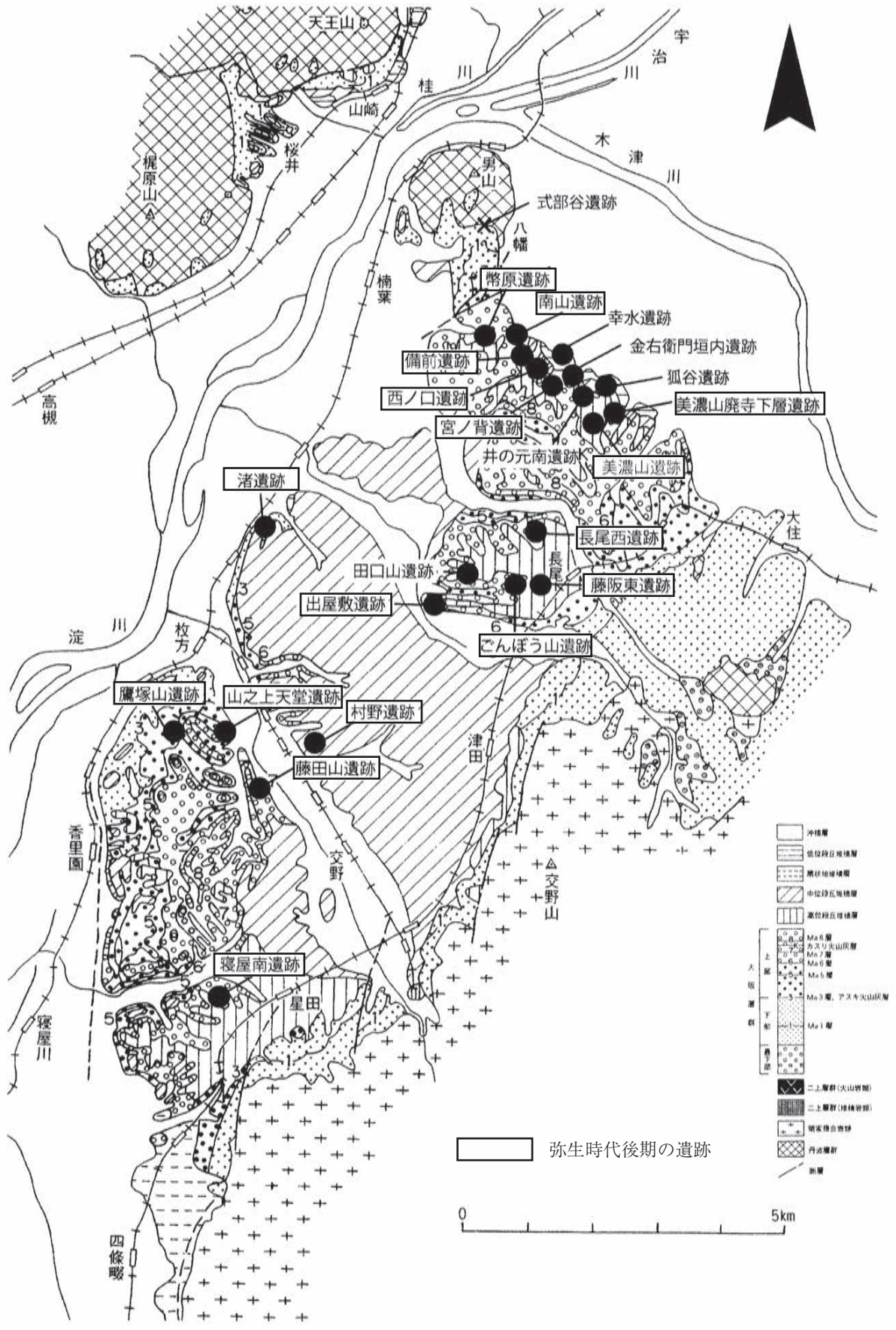


図1 主要遺跡分布図(市原実編1994『大阪層群』に加筆)

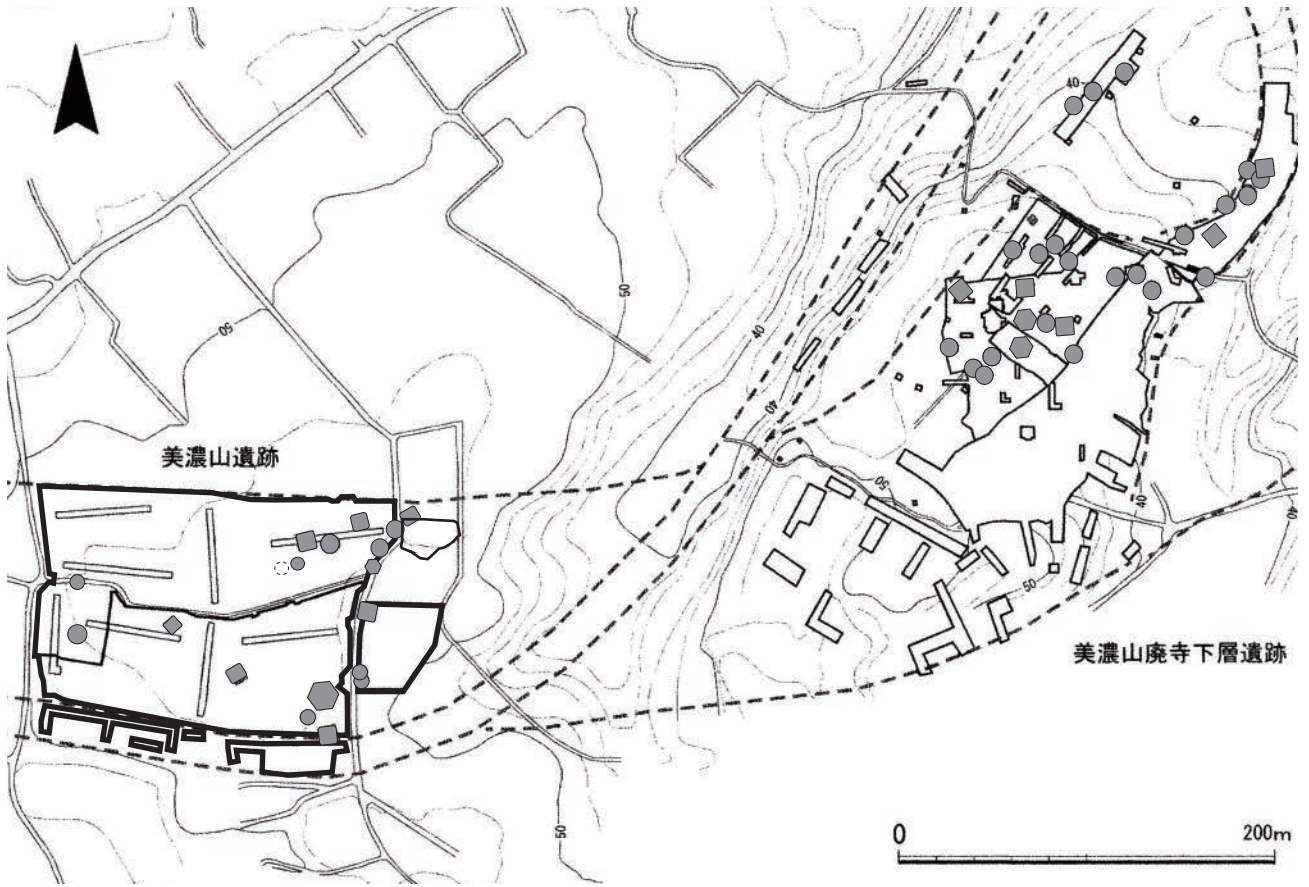
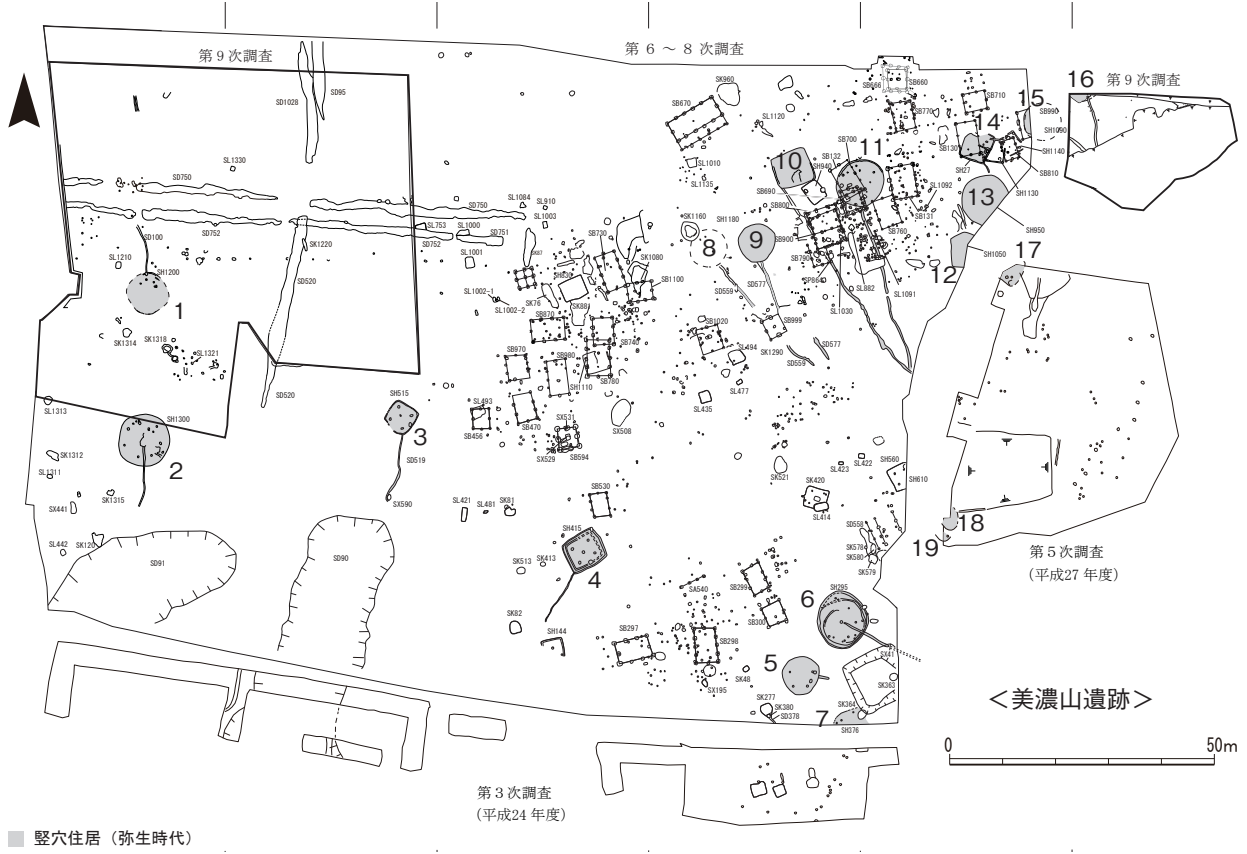


図2 美濃山遺跡、美濃山廃寺下層遺跡でみつけた弥生時代の住居

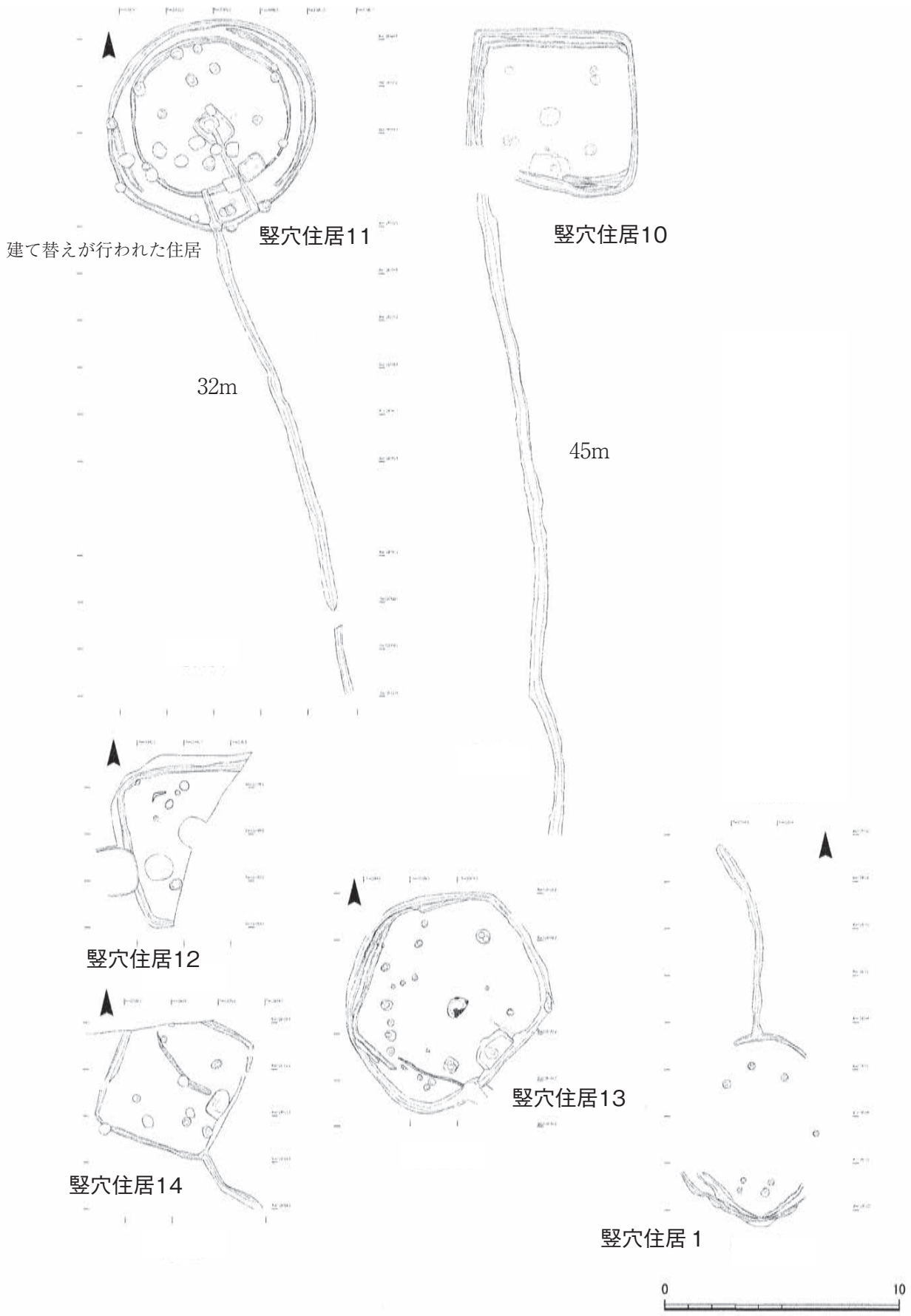
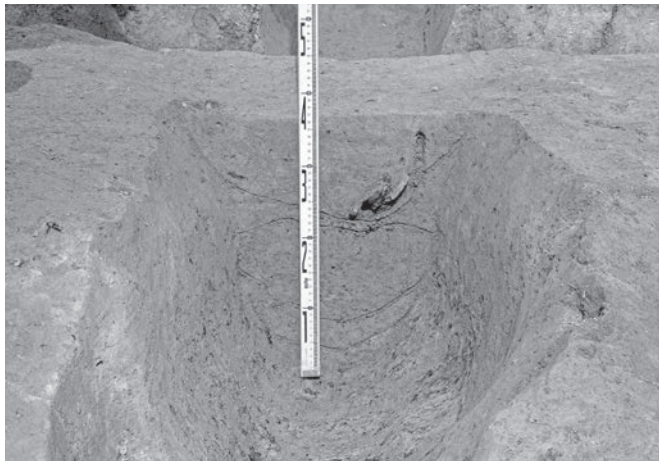
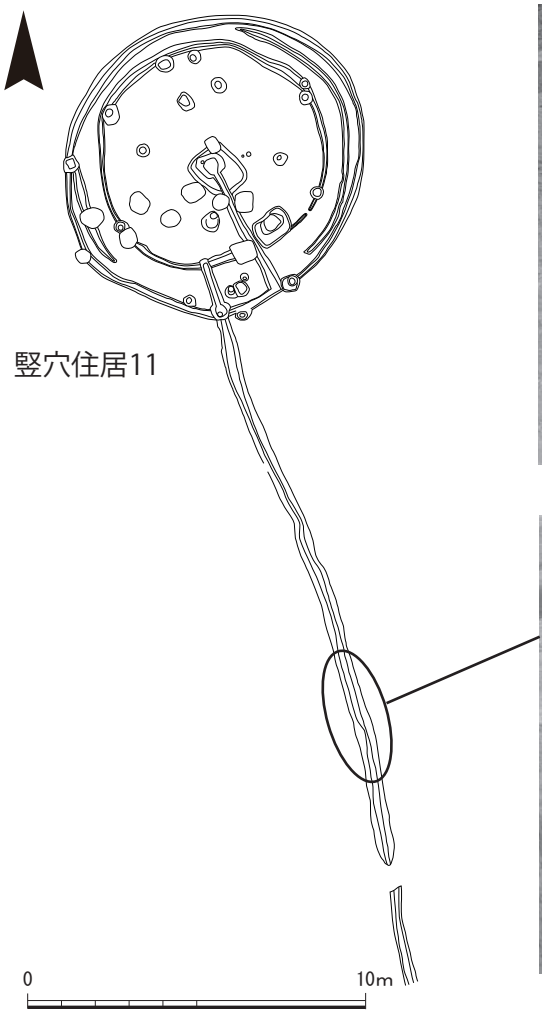


図3 美濃山遺跡の豎穴住居

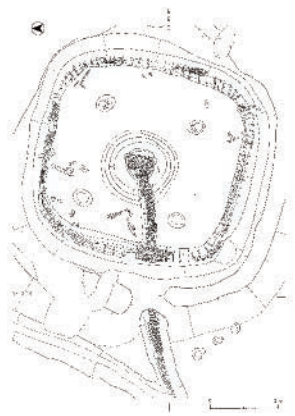


屋外排水溝断面

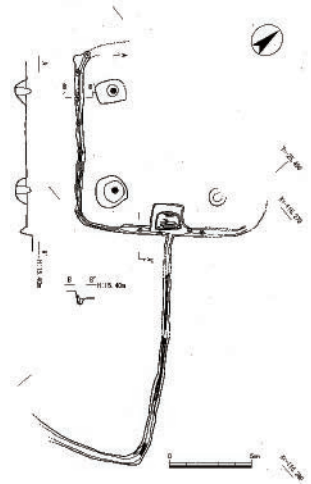


完形の弥生土器が多数出土

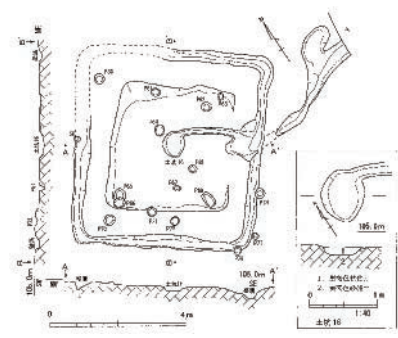
図4 竪穴住居11 屋外排水溝の断面と出土土器群



大阪府八尾市八尾南遺跡<竪穴建物9>

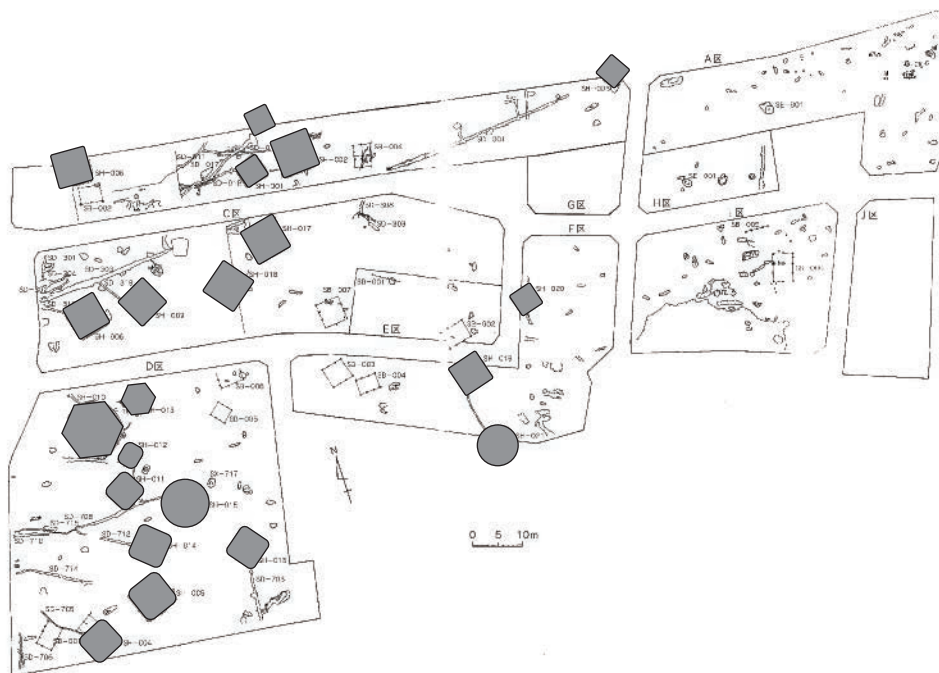


京都府京都市大藪遺跡<SH4>

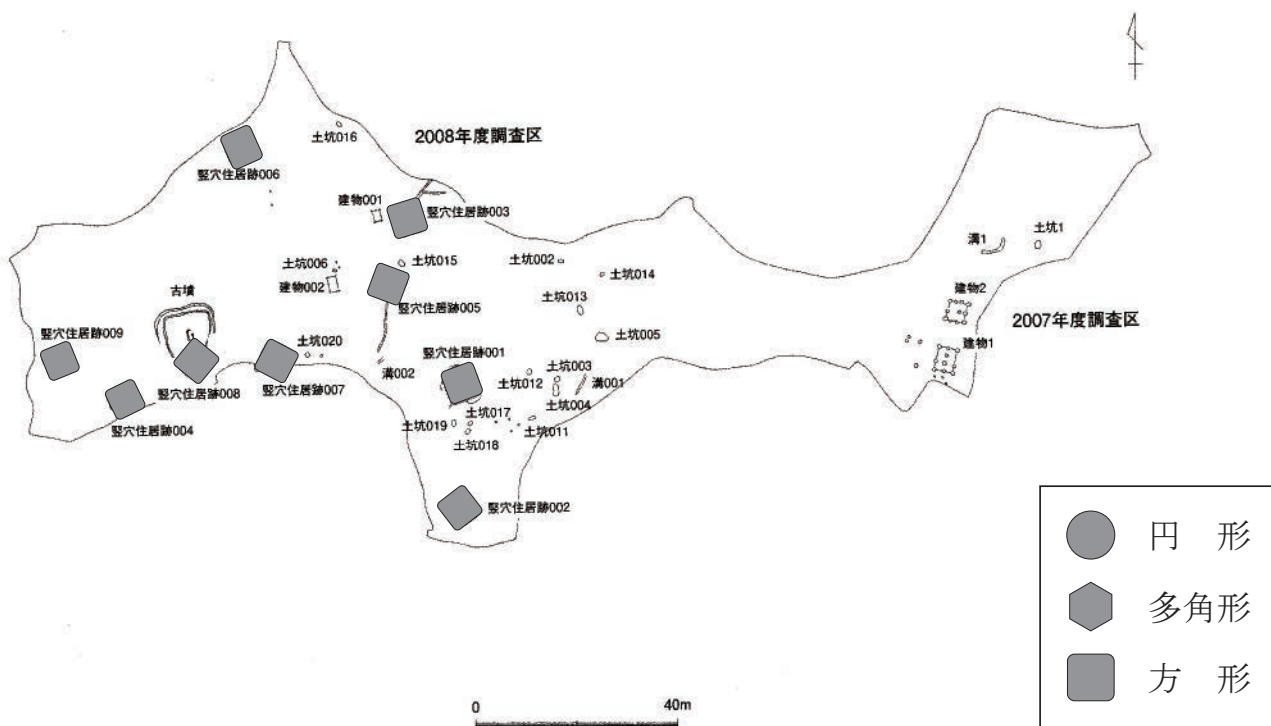


奈良県御所市中西遺跡<住居1>

図5 屋外排水溝の事例



<枚方市> 藤阪東遺跡遺構配置図 (S=1/1500)



<寝屋川市> 寢屋南遺跡遺構配置図 (S=1/1500)

図6 藤阪東遺跡および寢屋南遺跡の竪穴住居配置図

河内弥生人の住まいに迫る

- 大阪府八尾南遺跡の竪穴住居 -

茨木市教育委員会
正岡 大実

1. はじめに

大阪府の中央部付近、河内地域の平野部にある遺跡の多くは、新しい土砂が堆積してつくられる沖積平野に立地しています。こうした埋没環境や調査事例が多いことも手伝って、この地域では多くの貴重な成果が明らかとなっています。今回は、そうした調査の中から、弥生集落を考える上で大変重要な成果がわかった八尾南遺跡の事例をご紹介します。

2. 八尾南遺跡とは（図1・2）

八尾南遺跡は、大阪府八尾市域の南西部にひろがる旧石器時代から中世までの複合遺跡です。遺跡は、南方の羽曳野丘陵から延びる低位段丘の東側縁辺に位置しています。

今回ご紹介する発掘調査の成果は、2002年度より3年にわたり、財団法人大阪府文化財センター（現：公益財団法人大阪府文化財センター）が発掘調査を実施したものです。調査地点は遺跡範囲の南端に位置しており、1万㎡以上を調査しています。

調査の結果、調査地全面に広がる遺構面としては、中世後期～近世の耕作地及び平安時代末～中世前期の集落（第1面）、古墳時代中～後期・弥生時代後期末～古墳時代初頭の墓域（第2面）、弥生時代後期の集落（第3・3b面）、弥生時代前期の小区画水田（第4面）の4面を確認しています。遺物はコンテナにして約600箱程度がみつかっています。

3. 弥生時代集落の調査（図3～6）

第3・3b面とした弥生時代後期の遺構面では、竪穴建物・掘立柱建物・流路・水路・井戸・水田から構成される居住域と生産域がみつかりました。第3面は、弥生時代後期以後に細かな堆積物が厚く堆積したため、後世の擾乱の影響を受けにくい条件下にあったことに加え、氾濫に伴う侵食の影響が極めて少なかったことから、非常に良好な形で旧地表面が残存していたことが特筆すべき点といえます。なお、この時期の微地形は、調査区の中央を流れる自然流路を境に東西で異なり、東半では南東隅から北西へ、西半では南西隅か

ら北東へ向かって、それぞれ緩やかに傾斜しています。

次に、これら弥生時代集落の主な遺構の概要をみておきます。

〔**竪穴建物**〕 竪穴建物には、竪穴建物 8 を除くすべての建物に「**周堤**」と呼ばれる高まりがありました。周堤の上端から床面までの深度は深いもので 1 m 弱を測ります。調査で確認した竪穴建物は、平面形態や面積から次の 3 者に区分可能です。

主柱穴配置と平面形(番号は建物番号)	周堤裾の面積	壁溝内の床面積
①多主柱：円形ないしは隅丸方形(1・9)	約110～160㎡	約25～40㎡
②二本主柱：隅丸長方形(2・4～7・10)	約60～75㎡	約12～15㎡
③無主柱：隅丸長方形(3・8)	約45㎡(3のみ)	約9㎡

各竪穴建物にはさまざまな施設が認められますが、竪穴建物 1・3・6・9 の 4 棟には排水溝が、また、2・4・6・7・10 の 5 棟には周堤と隣接して外周土坑が備えられています。

なお、竪穴建物 8 は周堤や主柱穴を備えておらず、床面に広い被熱面を確認できたことや、**砥石**・鉄製品が出土したことから、住居とは異なる性格があったものと考えられます。

〔**流路**〕 調査区のほぼ中央を南―北に向かって流れる流路があります。流路からは弥生時代後期前半の土器が肩付近に貼り付くようにして多数見つかりました。

〔**水路**〕 調査区の東側には**堤**をもつ溝がありました。この溝は、調査区の南端で流路から分岐して南東―北東方向に微高地を貫いて延びています。規模は幅約 0.9m、深さ約 0.8m を測り、竪穴建物 9 の排水溝とも連結しています。断面の観察から、堤の盛直しは最低 2 回行われていることが判明しています。用水を流す水路としての性格が想定されます。

〔**井戸**〕 井戸は調査区の中央部分と南西部から 3 基が見つかりました。中央部に位置する 2 基には堤が備えられており、周辺からは土器がまとまって見つかりました。

〔**貯木遺構**〕 調査区中央部の流路際で多量の土器・木器を含む土坑が見つかりました。木器は有頭棒の製品や未製品があったので、貯木遺構としての性格が考えられます。

〔**溝**〕 流路の西側ではゆるやかな円弧を描く幅約 0.2m、深さ約 0.3m の溝が見つかりました。第 3 b 面で検出した掘立柱建物がこの溝の円弧内側に位置することは居住域の区画を考える上で興味深い事例といえます。

〔**水田**〕 調査区の西側では水田が見つかりました。水田は、北側へ傾斜する微地形を活かし地形の傾斜に直交して幹線畦畔を配し、それを支線畦畔で細かく区切って小区画を作り出しています。水田域の北側では、幅 1.0～1.4m、深さ 0.4～0.6m の溝が見つかりました。この溝の両側には高まりが存在し、南側には水口と考えられる 2 箇所^{みなくち}の途切れが設けられ

ていたことから、水田の用水を北東方向へ送る排水路だったと考えられます。

〔掘立柱建物〕 第3面の地表面を形成する土壌を除去した第3b面では、上面で遺構が認められなかった空白部分を中心に掘立柱建物・土坑・小穴・溝がみつかりました。掘立柱建物は、流路の西側で計25棟、東側では4棟を確認しています。建物は2×2間を中心に1×1間・3×1間・3×2間のものが認められますが、面積は10㎡前後の小規模なものが大半を占めています。建物はいずれも単独で存在していますが、竪穴建物との位置関係や、建物の分布状況から一定の時間幅が存在していた可能性が高いと考えています。

〔竪穴建物の構造〕 竪穴建物の上屋^{うわや}を構築する部材は基本的に持ち去られた状況にあると考えられますが、壁溝及び排水溝内では有機質の構造物の残存状況が良好なため、竪穴建物の構造を考える上で大変多くの重要な知見が得られています。ここではもっとも遺存状態の良好であった竪穴建物9を中心にそれらの構造について説明を加えておきます。

壁 葦などの繊維質の材を網代状^{あじろ}に貼付けて壁を作り出しています。状態の良い箇所では、単位毎に方向を違えさせ、粘土で隙間^{じゅうてん}を充填して貼付ける構造もわかりました。

壁溝^{へきこう} 壁溝は、幅約10～15cm、深さ15cmを測ります。溝の上には長さ10～15cmの細い横木^{よこ}を渡し、その上に直交する繊維質の蓋^{ふた}を被せる構造がとられていたようです。さらにこの上面には先に述べた壁材が垂れ下がって床面へと至っていました。このことから、八尾南遺跡の竪穴建物に関しては、壁溝が暗渠^{あんきょ}としての機能を有していたことがより明らかとなりました。なお、壁溝は東側を除く北・西・南の3方で二重に巡っており、各々内側の溝を埋める土は、床を構成する土^{はりゆか}(貼床)と同質の土であったことから、この竪穴建物は最低1回の拡張(補修)が図られていたようです。

中央土坑・排水溝 竪穴中央部には周囲に幅約20cm、高さ約5cmの堤を巡らす直径約1.8mの円形の土坑があります。堤の上端から一段目の底までの深さは約20cmほどですが、中央部にはさらに直径約50cm、深さ30cmほどの掘り込みが認められ、この上には、底板となる木の板を3～4枚並べ、その隅に相欠^{あいかけ}ホゾによって結合する方形の木枠が置かれていました。土坑の埋土は植物遺体や砂を主としており、土坑の底や周辺には被熱の痕跡は認められませんでした。なお、この土坑からは、西側壁面にトンネル^{うが}を穿って流路へ向かう排水溝が延びていましたが、溝に直交して横木を渡し、その上に厚さ2cm前後の板を蓋としてのせるなど、大変丁寧^{ていねい}な構造で作られています。なお、この排水溝は周堤下から外側については、溝内に繊維質の敷物と直径5～10cm前後の棒材からなる構造物が確認できました。トンネルの崩落を防ぎ、暗渠としての役割を果たすための造作と考えられます。

梯子 建物の南東隅では、梯子^{はしこ}が立てかけられた状態のままみつかりました。この梯子は、一木の丸太を削り込んで3段の足^{いちばく}がかりを作り出したもので、基部は床面を10cm前後

掘り込んで据えつけられていました。梯子が使用されていた時の状態を示している可能性が高く、建物の出入り口と内部の空間利用を考える上で重要な知見を得られました。

4. おわりに

この調査では弥生時代後期前半の居住域と生産域を非常に良好な形で確認することができました。周辺域では、^{ながはら}長原遺跡(大阪市)や^{こま}巨摩・^{わかえきた}若江北遺跡(東大阪市)等、いくつかの遺跡で周堤をもつ建物の存在が知られていますが、今回ご紹介した例は群を抜いて多くの情報を提示してくれたまたとない好例といえるでしょう。

【参考文献】

岡本茂史 2006 「周堤を巡らした建物－弥生時代の住居構造－」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2004 年度共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター

岡本茂史 2007 「「集落跡」から見えるもの－八尾南遺跡の集落景観－」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005 年度共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター

岡本茂史・正岡大実 2008 「弥生～古墳時代における建物遺構の構造研究」『研究調査報告第6集』(財)大阪府文化財センター

財団法人大阪府文化財センター 2008 『八尾南遺跡』

※本資料に掲載した挿図や写真等の資料の著作権は、公益財団法人 大阪府文化財センターに帰属します。資料の無断転載等をご遠慮ください。なお報告書はインターネット（全国遺跡報告総覧）でもご覧いただけます。

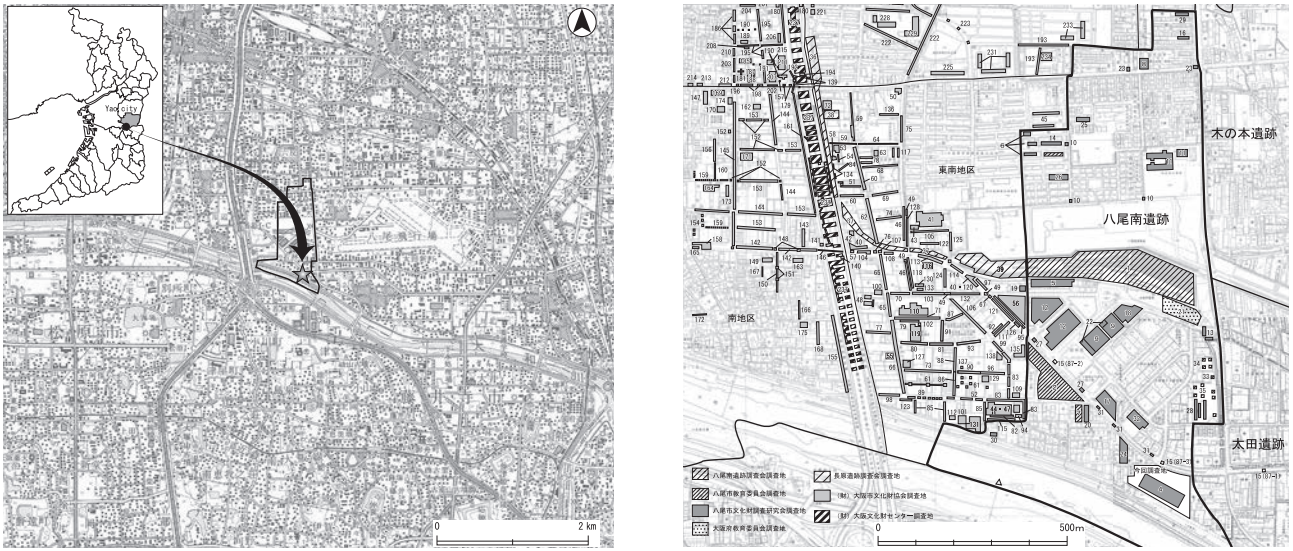


図1 調査地点位置図(左)・周辺の調査概要図(右)

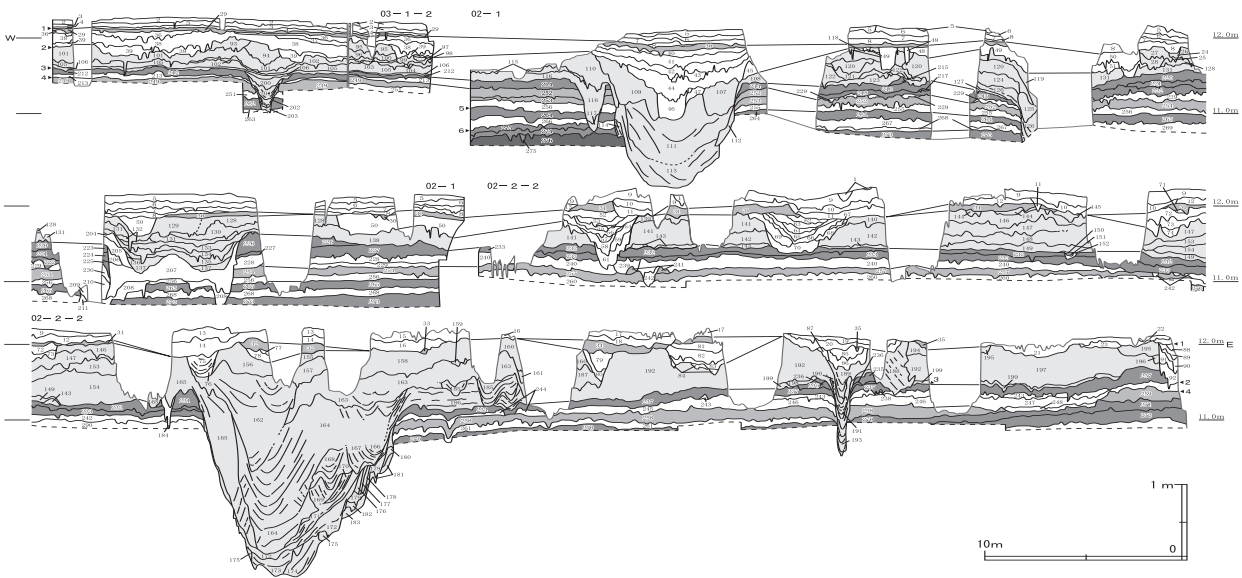


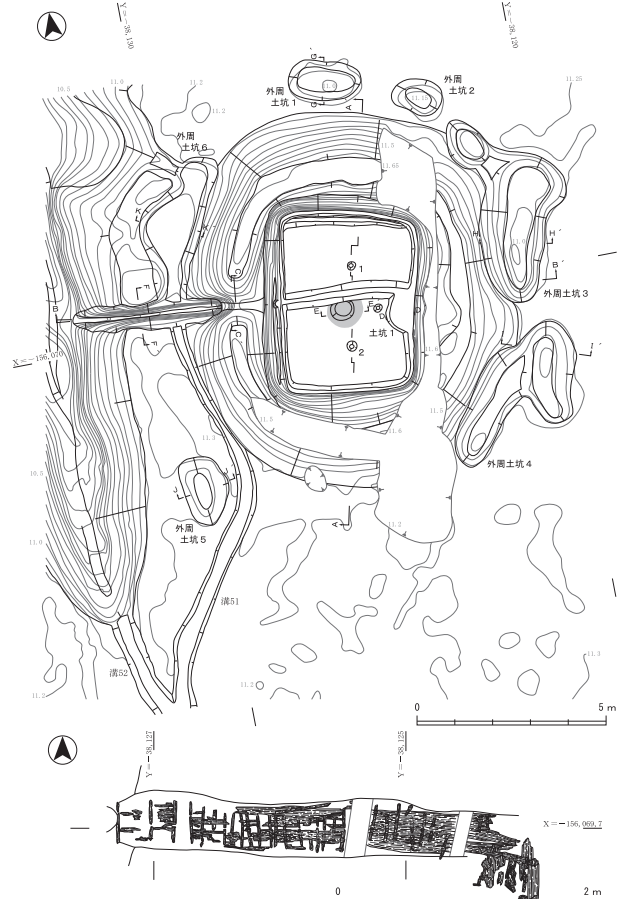
図2 基本層序模式図



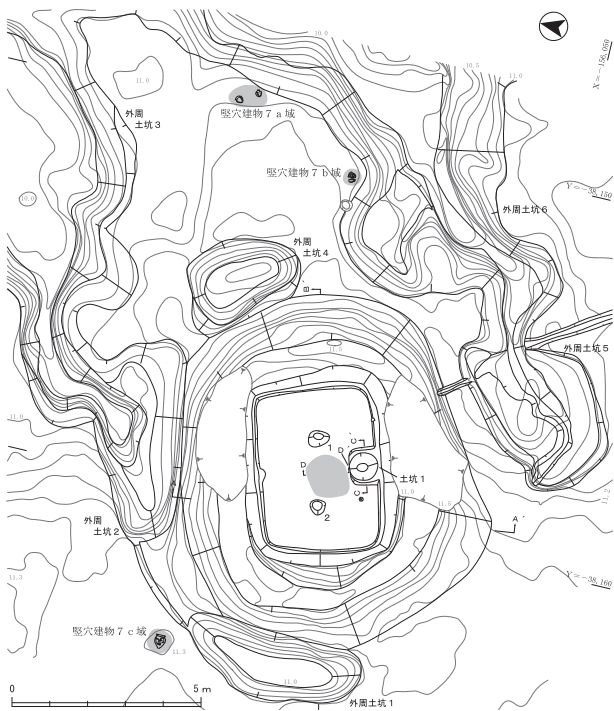
図3 第3面(上)・3b面(下)遺構配置図



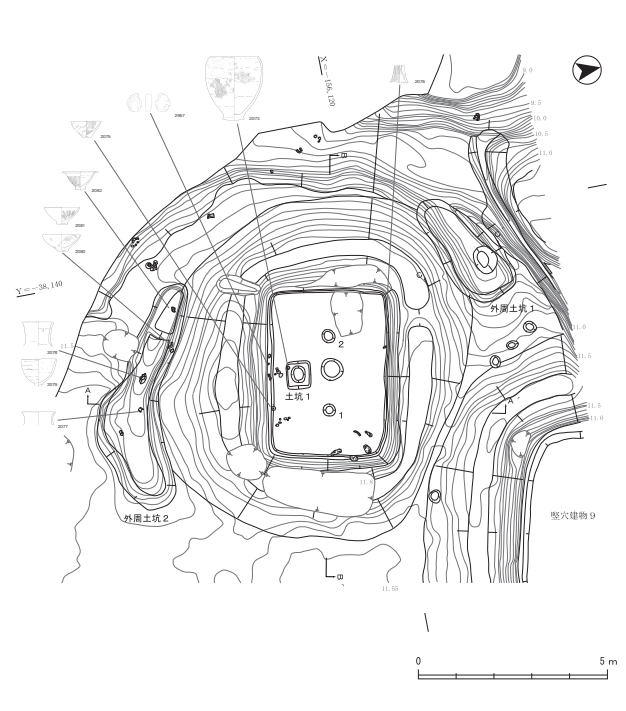
竪穴建物 1



竪穴建物 6

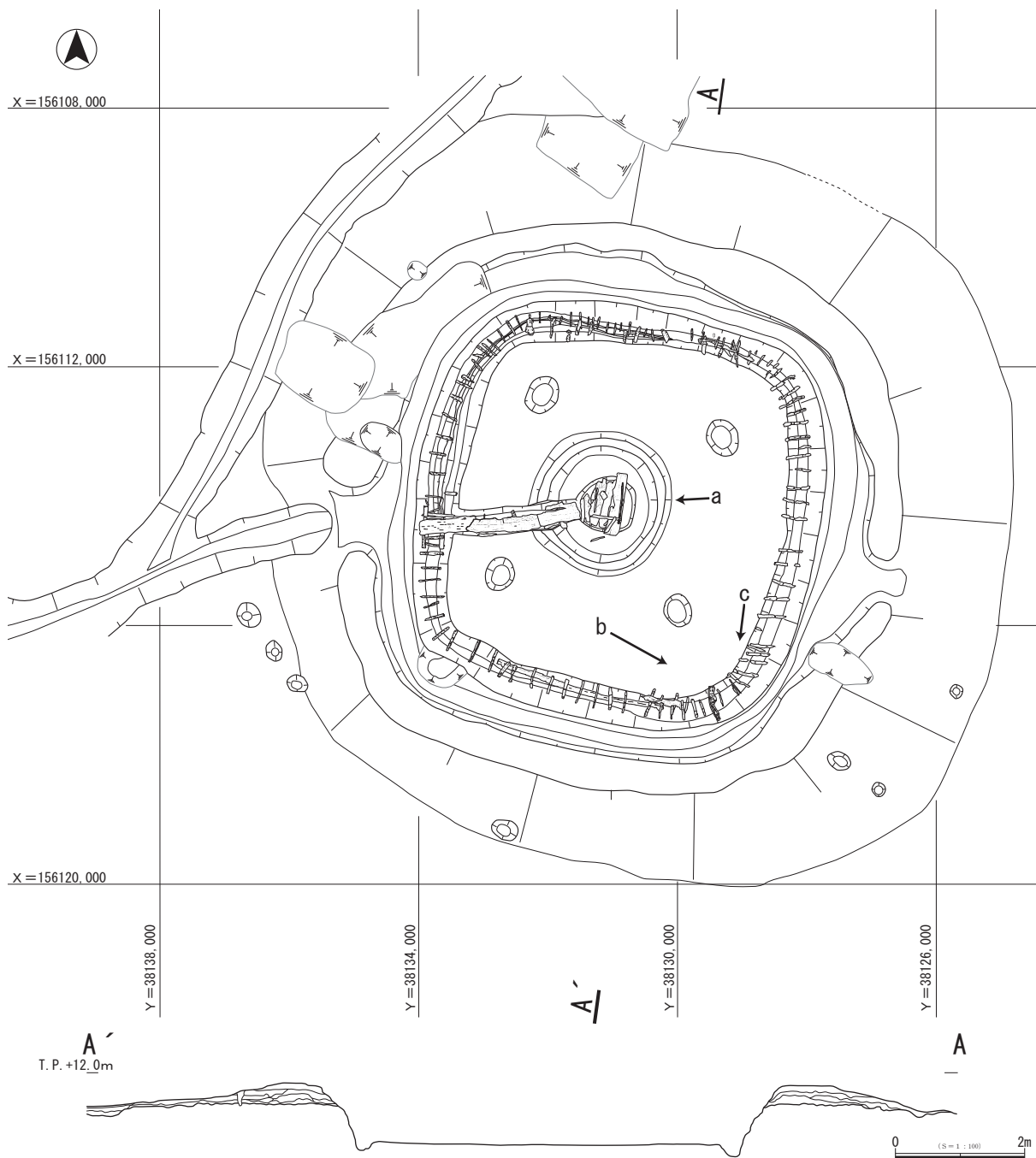


竪穴建物 7

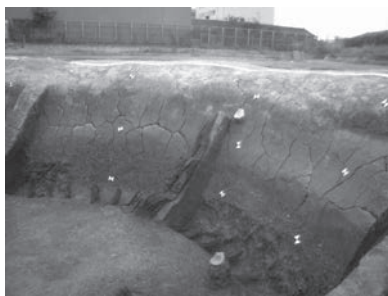


竪穴建物 10

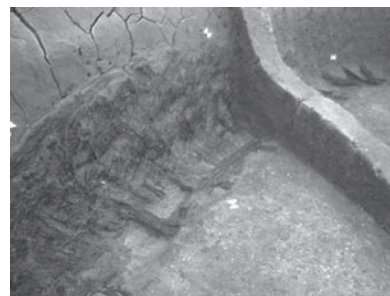
図4 排水溝や外周土坑をもつその他の竪穴建物



a : 中央土坑・排水溝構造物

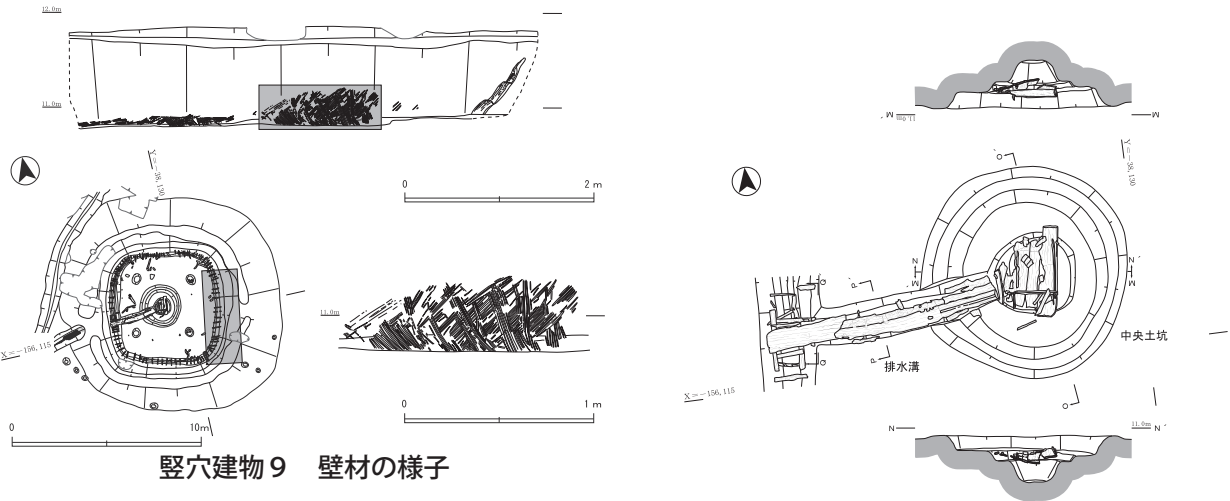


b : 梯子

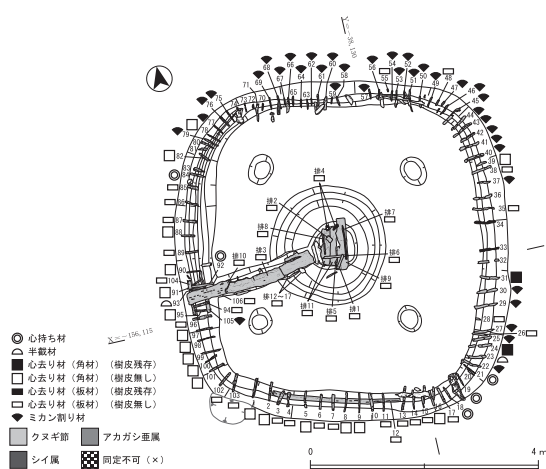


c : 壁溝・壁

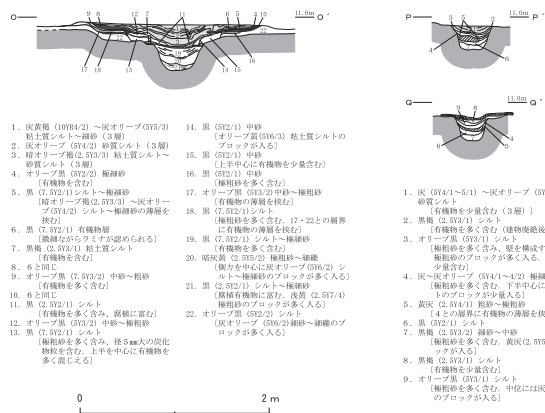
図5 豎穴建物9 平・断面図と内部施設



竪穴建物9 壁材の様子



- 心持ち材
- ◐ 半截材
- 心去り材 (角材) (樹皮残存)
- ◼ 心去り材 (角材) (樹皮無し)
- ◼ 心去り材 (板材) (樹皮残存)
- ◼ 心去り材 (板材) (樹皮無し)
- ◼ ミカン割り材
- クヌギ節
- アカガシ重畳
- シイ腐
- 同定不可 (×)

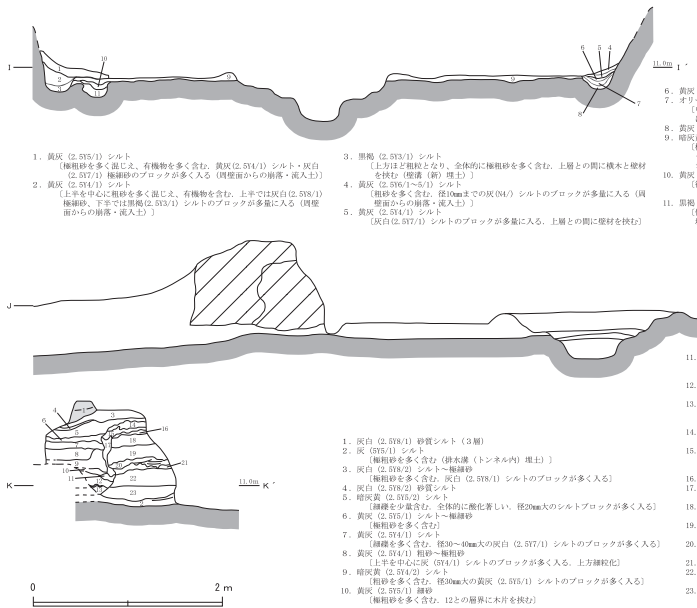


1. 灰美層 (100R4/2) ~灰オリーブ (S15/3) 粘土質シルト~細砂 (3層)
2. 灰オリーブ (S15/2) 砂質シルト (3層)
3. 灰オリーブ層 (S15/3) 粘土質シルト~砂質シルト (3層)
4. オリーブ層 (S12/2) 極細砂 (有機物を含む)
5. 黒 (L2/S12/1)シルト~極細砂 (腐オリーブ層 (S15/3) ~灰オリーブ (S15/2)シルト~極細砂の層層を挟む)
6. 黒 (L2/S12/1) 有機物層 (腐葉ならみなどが認められる)
7. 黒層 (L2/S12/1) 粘土質シルト (有機物を含む)
8. 6と同じ
9. オリーブ層 (L2/S12/2) 中砂~粗砂 (有機物を含む)
10. 6と同じ
11. 黒 (L2/S12/1) シルト (有機物を含む。縦軸に置む)
12. オリーブ層 (S15/2) 中砂~極細砂 (極細砂を多く含む)
13. 黒 (L2/S12/1) シルト (極細砂を多く含む。径5mm以下の炭化物を含む。上半を中心に有機物を多く含む)
14. 黒 (S12/1) 中砂 (オリーブ層 (S15/3) 粘土質シルトのブロックが入る)
15. 黒 (S12/1) 中砂 (上半中心に有機物を少量含む)
16. 黒 (S12/1) 中砂 (極細砂を多く含む)
17. オリーブ層 (S15/2)中砂~極細砂 (有機物の層層を挟む)
18. 黒 (L2/S12/1)シルト~極細砂 (有機物を含む)
19. 黒 (L2/S12/1) 中砂~極細砂 (腐葉を多く含む)
20. 暗灰層 (L2/S15/2) 極細砂~細砂 (腐葉を中心に灰オリーブ (S15/2) シルト~極細砂のブロックが多く入る)
21. 黒 (L2/S12/1) シルト~極細砂 (腐葉を多く含む。炭質 (L2/S17/4) 極細砂のブロックが多く入る)
22. オリーブ層 (S15/2) シルト (灰オリーブ (S15/2)中砂~極細砂のブロックが多く入る)
23. 灰美層 (100R5/2) 粗砂 (細砂を多く含む)

1. 灰 (S14/1~S/1) ~灰オリーブ (S15/2) シルト~砂質シルト (有機物を少量含む (3層))
2. 黒層 (L2/S12/1) シルト (有機物を多く含む (植物炭酸塩の水成物積層))
3. オリーブ層 (S15/1) シルト (極細砂を多く含む。壁を構成する黄灰 (L2/S15/1) 極細砂のブロックが少量入る)
4. 灰~灰オリーブ (S14/1~S/2) 極細砂 (極細砂を多く含む。下半中心に灰白 (S18/1) シルトのブロックが少量入る)
5. 黄灰 (L2/S14/1) 粗砂~極細砂 (4上の層層に有機物の層層を挟む)
6. 黒 (S12/1) シルト (極細砂を多く含む。黄灰 (L2/S15/1) 極細砂のブロックが入る)
7. 黒層 (L2/S12/2) 細砂~中砂 (有機物を少量含む)
8. 黒層 (L2/S12/1) シルト (極細砂を多く含む。上半中心に径20mmのシルトのブロックが入る)

竪穴建物9 壁溝部材の様子

竪穴建物9 中央土坑の様子



1. 黄灰 (L2/S15/1) シルト (極細砂を多く含む。有機物を含む。黄灰 (L2/S14/1) シルト~灰白 (L2/S17/1) 極細砂のブロックが多く入る (側壁面からの崩落・流入土))
2. 黄灰 (L2/S14/1) シルト (上半中心に極細砂を多く含む。有機物を含む。上半では灰白 (L2/S18/1) 極細砂。下半では黒層 (L2/S13/1) シルトのブロックが少量入る (側壁面からの崩落・流入土))
3. 黒層 (L2/S13/1) シルト (上半は土層となり。全体的に極細砂を多く含む。上層との間に極細土と腐材を挟む (腐葉 (薪) 堆土))
4. 黄灰 (L2/S14/1~S/1) シルト (腐葉を多く含む。径50mm以下の炭 (S14) シルトのブロックが少量入る (側壁面からの崩落・流入土))
5. 黄灰 (L2/S17/1) シルト (シルトのブロックが少量入る。上層との間に腐材を挟む)

6. 黄灰 (L2/S14/1) シルト (極細砂を多く含む)
7. オリーブ層 (L2/S15/1) シルト (中砂~粗砂を多く含む。上層との間に腐材。下層との間に腐材・積木を挟む)
8. 黄灰 (L2/S14/1) シルト (腐葉堆土)
9. 暗灰層 (L2/S15/2) シルト~極細砂 (極細砂を多く含む。灰白 (S17/2) シルトのブロックが多く入り。中央土坑の底層には明オリーブ灰 (S15/1) シルトのブロックが少量入る (腐葉 (薪) 堆土))
10. 黄灰 (L2/S15/1) シルト (径10~20mmの炭 (S16/1) シルトのブロックが多く入る (腐葉 (薪) 堆土))
11. 黒層 (L2/S13/1) シルト (腐材のベースである極細砂~細砂を多く含む (腐葉 (薪) 堆土))

1. 灰白 (L2/S18/1) 砂質シルト (3層)
2. 灰 (S18/1) シルト (極細砂を多く含む (排水溝 (トンネル内) 堆土))
3. 灰白 (L2/S18/2) シルト~極細砂 (極細砂を多く含む。灰白 (L2/S18/1) シルトのブロックが多く入る)
4. 灰白 (L2/S18/2) 砂質シルト
5. 暗灰層 (L2/S15/2) シルト (細砂を少量含む。全体的に炭化著しい。径20mm以下のシルトのブロックが多く入る)
6. 黄灰 (L2/S15/1) シルト~極細砂 (極細砂を多く含む)
7. 黄灰 (L2/S15/1) シルト (細砂を多く含む。径30~100mmの灰白 (L2/S17/1) シルトのブロックが多く入る)
8. 黄灰 (L2/S14/1) 粗砂~極細砂 (上半を構成する (S15/1) シルトのブロックが多く入る。上方細粒化)
9. 暗灰層 (L2/S14/2) シルト (腐葉を多く含む。径20mmの黄灰 (L2/S15/1) シルトのブロックが多く入る)
10. 黄灰 (L2/S15/1) 細砂 (極細砂を多く含む。12との層層に木片を挟む)
11. 黄灰 (L2/S14/1) シルト (極細砂を多く含む。径20mmの灰白 (L2/S17/1) シルトのブロックが多く入る)
12. 灰 (S18/1) 砂質シルト
13. 灰 (S18/1) 砂質シルト (最上は22の層層により粗砂~極細砂が少量入る)
14. 灰 (S18/1) シルト (上半に枝・丸木等を多く含む。下半を中心に灰白 (L2/S17/1) のブロックが少量入る)
15. 灰 (S15/1) シルト (細砂を多く含む。細砂も少量含む。炭化著しい)
16. 黄灰 (L2/S14/1) 砂質シルト
17. 黄灰 (100R4/1) ~灰白 (L2/S17/1) シルト (腐土層上100~150の腐葉土)
18. 黄灰 (100R4/1) シルト~極細砂 (細砂を多く含む (4-a層))
19. 灰白 (L2/S17/1) シルト (細砂を多く含む (4-b層))
20. 灰 (S18/1) 細砂 (極細砂を多く含む (4-b層))
21. 灰 (S15~S16/1) シルト (5層)
22. 黒層 (100R3/1) 粗砂
23. 灰美層 (100R5/2) 粗砂 (細砂を多く含む (6-b層))

竪穴建物9 中央土坑と排水溝の様子

図6 竪穴建物9の内部施設

メモ

A large rectangular area with a wavy border, intended for writing notes. The border is a simple, continuous line with a regular, small-scale wave pattern. The interior of the rectangle is completely blank, providing a space for text or drawings.

弥生～古墳時代移行期の集落と社会

同志社大学歴史資料館

若林 邦彦

1. はじめに

弥生時代は水稻農耕が本格的に始まった時代、古墳時代は地域の権力者が古墳を作り列島規模で同盟を組んだ時代。これが、教科書や概説書の主な評価です。水田遺構やコメ作りの道具類の存在で弥生時代開始を語り、今度はお墓のありかたで社会や時代の変化を説明しています。しかし、どちらの時代にも人々は様々な場所に住処をもうけてきました。ある時は湿地帯に、ある時は小高い丘の上に。違いがあるといわれる2つの時代は、ムラのあり方や立地からみればどう変化しているのでしょうか？集落遺跡という共通項を使うことによって、時代の変化(特に生活の)をもっとリアルに描きだすことができるのではないかと思います。

今日の主役の八幡市美濃山遺跡は、弥生時代後期(AD 1-2世紀)を中心とするムラの跡です。これは、弥生時代から古墳時代へと社会が変わり始めた時代といわれています。美濃山遺跡以外の集落遺跡特に京都盆地・淀川水系はどのように変わってきているのでしょうか。主役の美濃山遺跡の弥生ムラの背景をみることで、遺跡を見る背景を考えてみましょう。

2. 淀川水系や京都盆地の弥生～古墳時代遺跡の立地と環境変化

図1は、近畿地方を含む中部日本の紀元前6世紀～紀元11世紀の長きにわたる降水量変動を、出土木質遺物の年輪酸素同位体比分析によって示し、それに淀川右岸域の低湿地(三角州性低地)での集落立地比率を重ね合わせたグラフです。折れ線グラフが降水量変動(グラフの下方向のほうが降雨量が多い)の復元を示し、帯グラフが河川氾濫原や自然堤防地形の領域の集落遺跡検出例の比率をしめしています。

グラフを見ると降水量に関する長期にわたる傾向も見受けられます。紀元前5～紀元前2世紀の間には降水量が少なく基本的に乾燥傾向の時代です。これは、近畿地方においては主に弥生時代前期～中期にあたります。ところが、紀元前1世紀を境に大きく降水量が増加していて、その傾向は紀元6世紀まで継続しています。これは、弥生時代～古墳時代の政治的・社会的統合の過程における画期とも大きく関係していそうです。

つまり、降水量変動における長期傾向において、人口増がみられるが広域統合が進行しない弥生時代前中期は安定的な乾燥期、列島規模の政治統合が進行する弥生時代後期～古墳時代は湿潤期という違いがみられます。既往の歴史変化の認識と長期にわたる降水量変動の傾向の間には何らかの相関があるのではないかというアイデアが湧き上がってきます。また、それはムラの立地と関係しているようです。

また図2のグラフを見ると、弥生時代の前期には、三角州性堆積領域の低湿地にほとんどの集落があったとわかります。弥生時代中期には低湿地のムラは減少し、弥生時代後期～古墳時代前期にはその傾向は徐々に進行し、古墳時代中期になると極端に低湿地集落が減ります。つまり、弥生時代から古墳時代にかけて、集落立地が三角州性堆積の低湿地よりも扇状地中部・段丘・丘陵上の事例が増えていく傾向がみられるだけでなく、その傾向が古墳時代前期以後に強まり、特に古墳代中期に顕著となることがわかります。また、図2は約100年ごとでの居住地点発見数の変化ですが、弥生時代後期にはその数が急速に増大していることがわかります。人口増とともにムラの位置が頻繁に移動するためにこういうことが起こっている可能性があります。

こういった変化は実際に地図上で遺跡動態をみた場合(図3～8)にも、はっきり見えます。京都盆地の遺跡分布(図9～16)をみても同じ傾向がうかがえます。どうやら、京都盆地や淀川水系全体で同じような変化があるようです。また、美濃山遺跡の形成された弥生時代後期は、こういった山裾や丘の上のムラが増えてくる時代にあたります。中位段丘上に広く分布する美濃山遺跡は「弥生後期によくみられるようになる」立地ともいえます。どうしてこういう変化が起きるのでしょうか？また、この変化が進行する社会にはどのような人間関係の変化が考えられるのでしょうか？

3. そもそも弥生時代人はどういう場所を好んで住むのか

そのことは、もともと弥生文化の開始期に人々がどういう場所にムラをつくり続けていたのかをみることによって考えることができます。詳細な遺跡調査成果の多い大阪平野中部には、そのことが良くわかる例があります。例えば、河内湖に面した東大阪市瓜生堂遺跡とその周辺の2km圏の集落動態は興味深い例(図15)です。ここでは、1-2km圏内には常に複数の弥生集落がみられることがわかっています。つまり、水田に隣接して集落が営まれ、中小規模の人間集団がすぐ脇の耕作で農業を営むことが一般的だったと考えられます。また、東大阪市・八尾市池島・福万寺遺跡では、洪水などによる地形変化を何度も繰り返しながらも、細かく移動しながら弥生時代を通じて径1km圏ですっと水田が形成されています。一時的にこの遺跡から水田がみえなくなる時期も東南約1kmの大竹遺跡に

水田がみられ、やはり平野部では径2 km圏から耕作地やそれに伴うムラがなくなることはないようです。つまり、弥生人は低湿地が好きなのです。なぜなら小規模な水田の傍らにムラを置くことが基本だからです。弥生後期の八尾市八尾南遺跡の洪水で覆われた集落の景観はその様子を典型的に残しています。

そういった状態から、古墳時代特に5世紀の古墳時代中期には大きな変化が起きたといえそうです。

つまり、長期変動上降水量の多い古墳時代には、居住地と水田の分離を反映しており、農業経営の集団化が5世紀を中心に極端に進んだといえるでしょう(図16)。誰かの差配により、古墳の近くに集められた人々が少し離れた定められた農地まで耕しに行く。難しい言葉で言えば、集団の統合です。そんな社会へと変化していくのです。美濃山遺跡のムラができた弥生時代後期はそういった社会への変化が本格化する時期とも言えそうです。

こういった変化の背後に古墳時代を中心とする湿潤期という背景が重要かもしれません。低湿地のムラが減るのは、洪水やそれによる耕地の変化をさけるためだった可能性もあります。環境が地域の人々の関係を変える大きな要因の一つだったとも考えられます。しかし、グラフをみると古墳時代の集落立地は少し異常です。自然環境だけが理由でしょうか。

4. 古墳時代への変化と移行期としての弥生後期社会

実は、淀川流域では、古墳前期までは、弥生時代からつづく各遺跡群におおむね対応して大中規模古墳が造営され、古墳中期には大中規模古墳造営されるのは一部の河川流域に限られます。この地域では鍛冶生産・埴輪生産など特殊専門集落がみられはじめます。全国的に、古墳時代中期以後には鉄器の鍛冶生産を行った遺跡が近畿地方では飛躍的に増えてきます。さらに高度な窯業技術による須恵器の生産も各地で始まります。つまり、集落立地の画期は特定地域への大規模古墳の集中する時期と、それを主導する地域首長層による手工業生産の集中管理期とも一致するのです。

つまり、湿潤傾向が長く続いた末の古墳時代中期には、単に気候変動は環境変化だけでなく、社会の統合とも相関して集団のありかたに影響を与えていた可能性があります。様々なその相互作用により古代国家にいたる集団関係が変化したのです。また、こういった動態からは、洪水をはじめとする災害からの復興・再生が進行する際の対応領域・集団規模が時代によって拡大してきたことがよみとれます。古代国家の成立は、単純な権力の統合過程という観点からだけではなく、ムラどうしが結び付く地域社会の拡大縮小を利用して環境に適応する社会システムを生み出す過程として理解できます。

こういった変化の最初の段階が弥生時代後期といえるでしょう。美濃山遺跡に目を転じれば、こういった地域社会のまとまりが大きく変化し始める時代にできた村ということになります。図2で示したように、弥生時代後期がムラの移住が頻繁に起こった時代、しかも低地にも丘の上にも移動しながらムラをいくつもつくっていくような時代だとするならば、そういった人々の動きの一環として、段丘上の美濃山遺跡ができたと考えることができるでしょう。美濃山遺跡の住居群のある一番標高の高い地点は、京都盆地だけでなく、淀川流域の大阪平野側も見渡せる位置にあります。これは、社会の変化が起こり始める時期に人々が大きな範囲で移動を始めた可能性を示しています。

5. おわりにー調査成果公開への期待ー

ですから、美濃山遺跡の弥生ムラの時代は、まだ、どういうふう to 社会がまとまっていくのか見えない状態だったと考えられます。一方、これまでの小さな耕作地にしがみつくわけにはいかない関係へとかわりはじめる時代です。美濃山遺跡の弥生ムラの人々は、後戻りのできない世界へと踏み出していたと思います。かたや美濃山遺跡では二つの尾根にわかれて暮らしています。激しく変化しはじめた時代の中で美濃山遺跡の中のいくつかのグループはお互いにどのようにふるまっていたのでしょうか。それは、どの時期の竪穴建物がどこにいくつあって、それらからどのような遺物が出土しているかという詳細な情報つまり、発掘調査報告書のデータをもとに議論されるべきことでしょう。私は、そういった実のある調査成果の公表を心待ちにしています。

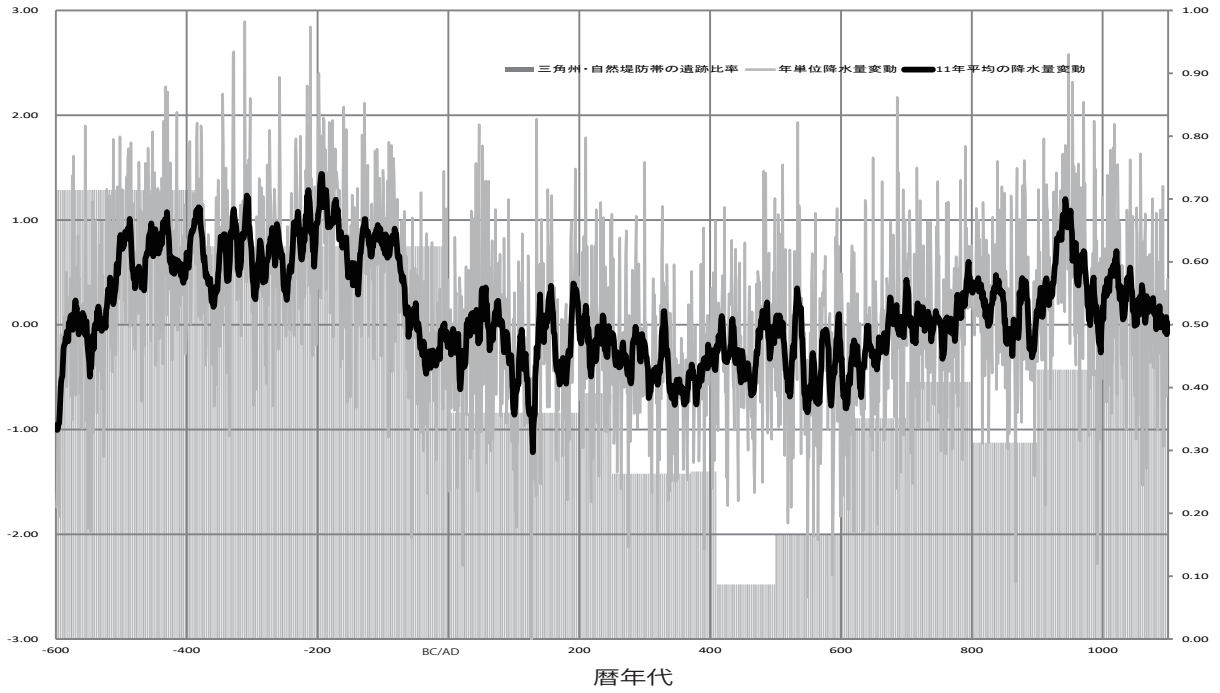


図1 降水量変動と淀川流域の低湿地遺跡の比率変化(前6～後11世紀)

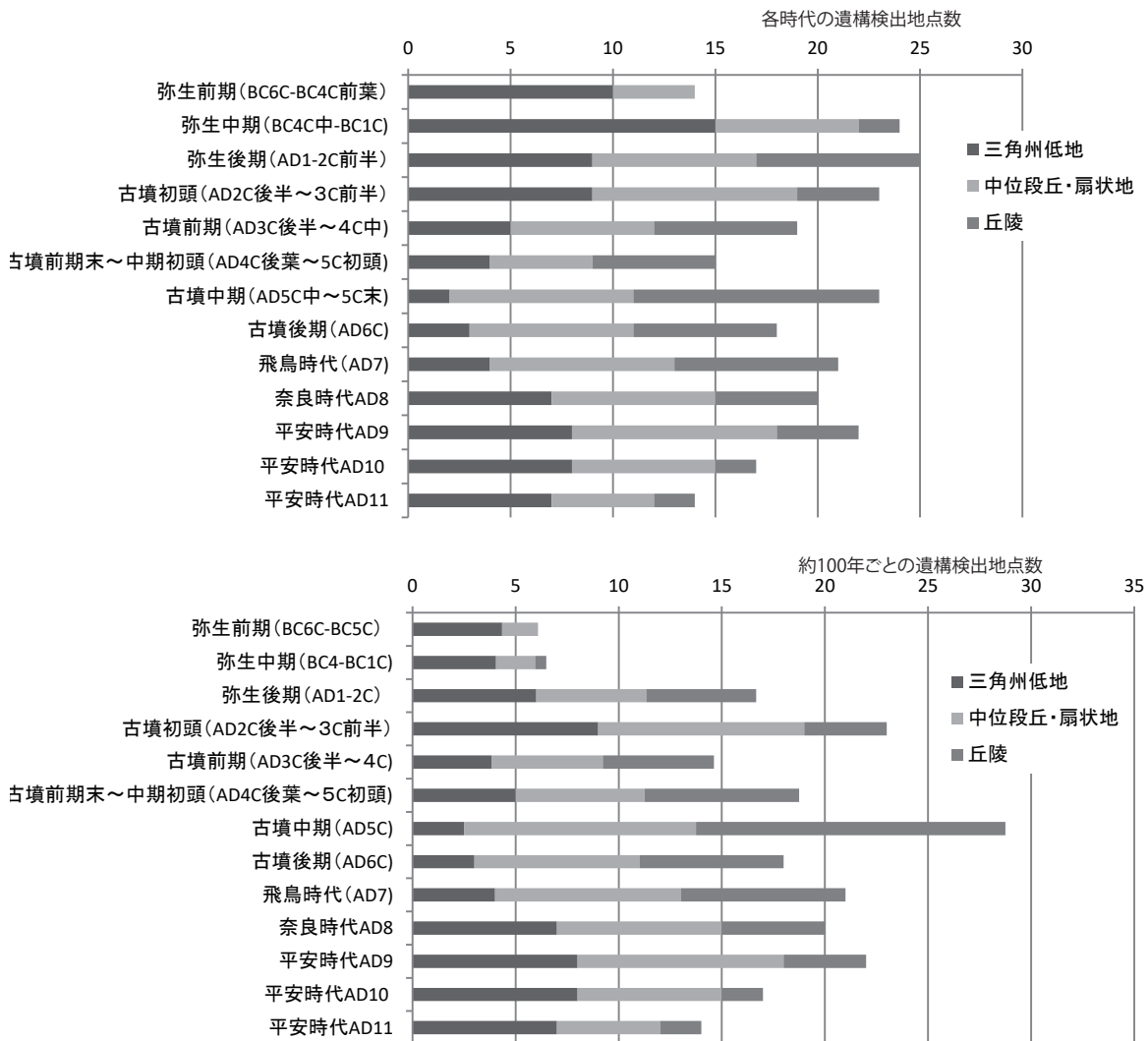


図2 淀川水系における約100年ごとの遺構検出地点分布変化 (上・時代ごとの変化、下・約100年ごとの変化)

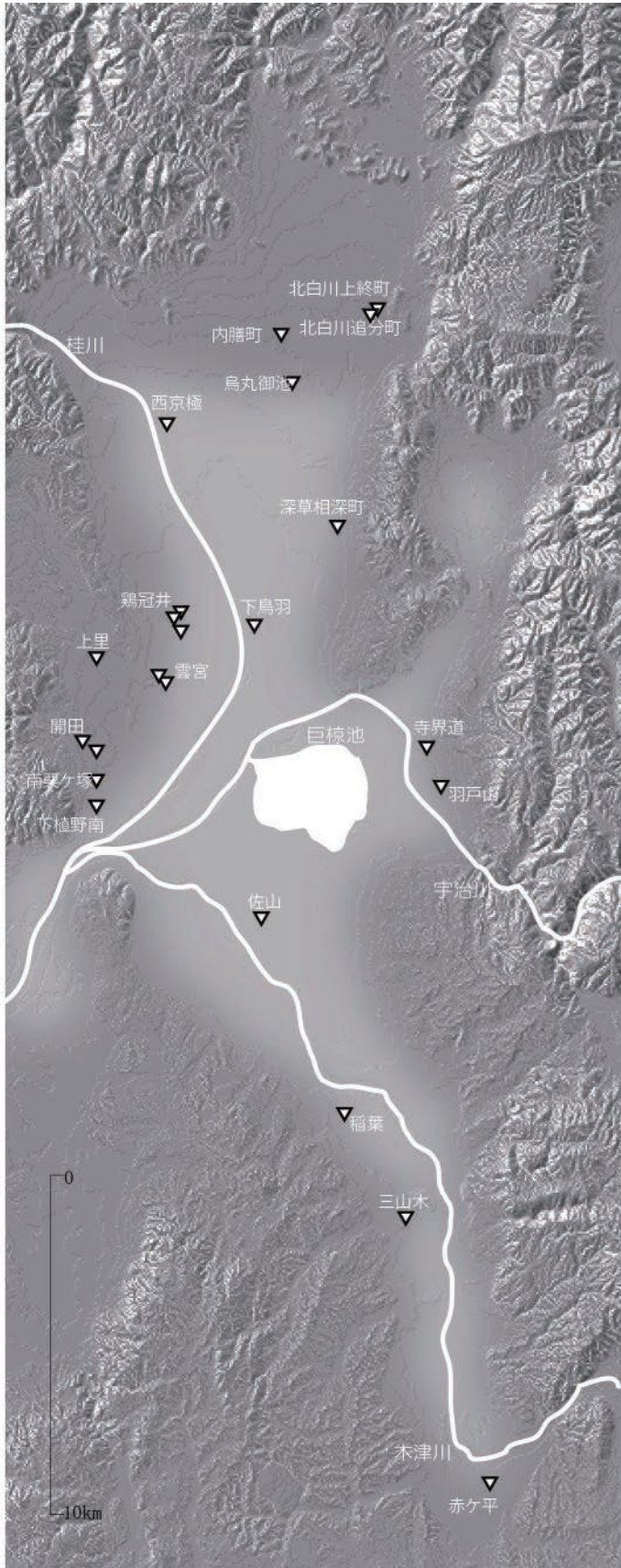


図9 京都盆地・木津川流域の弥生前期遺跡分布

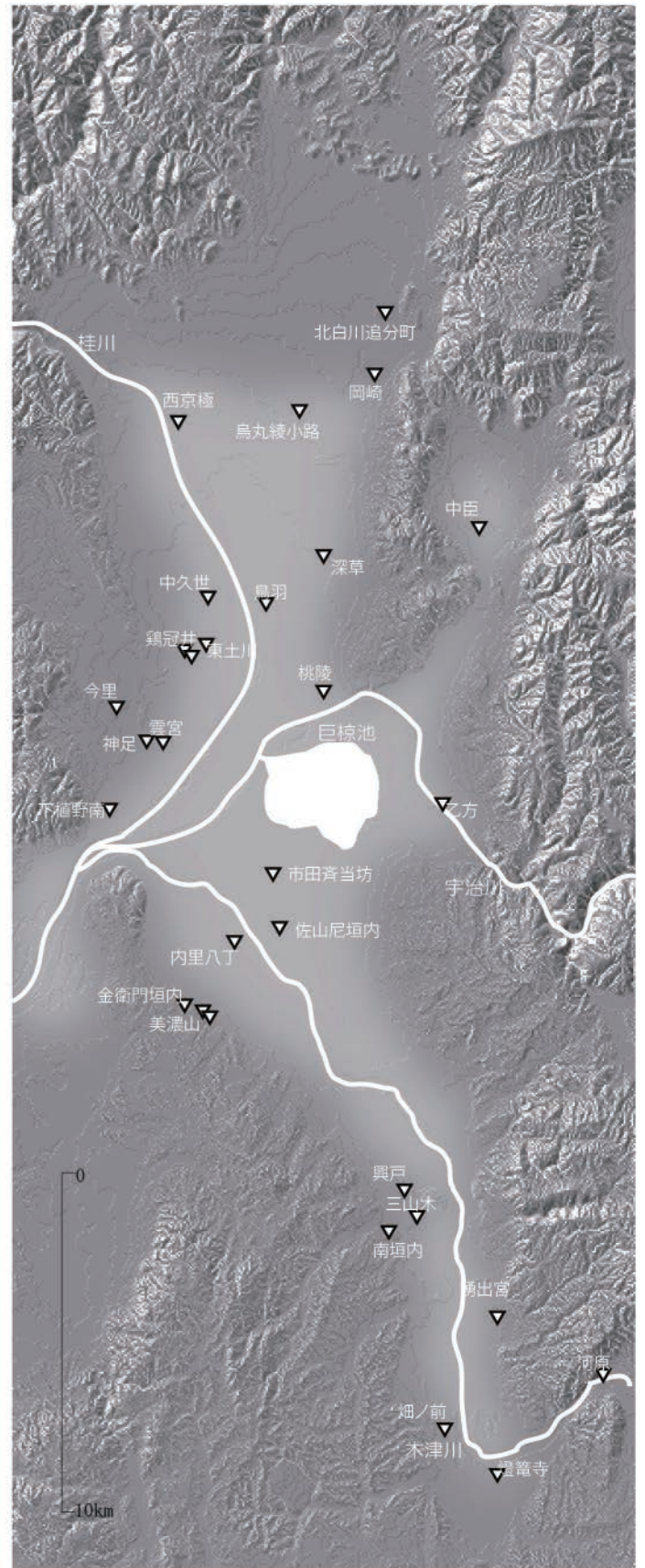


図10 京都盆地・木津川流域の弥生中期遺跡分布

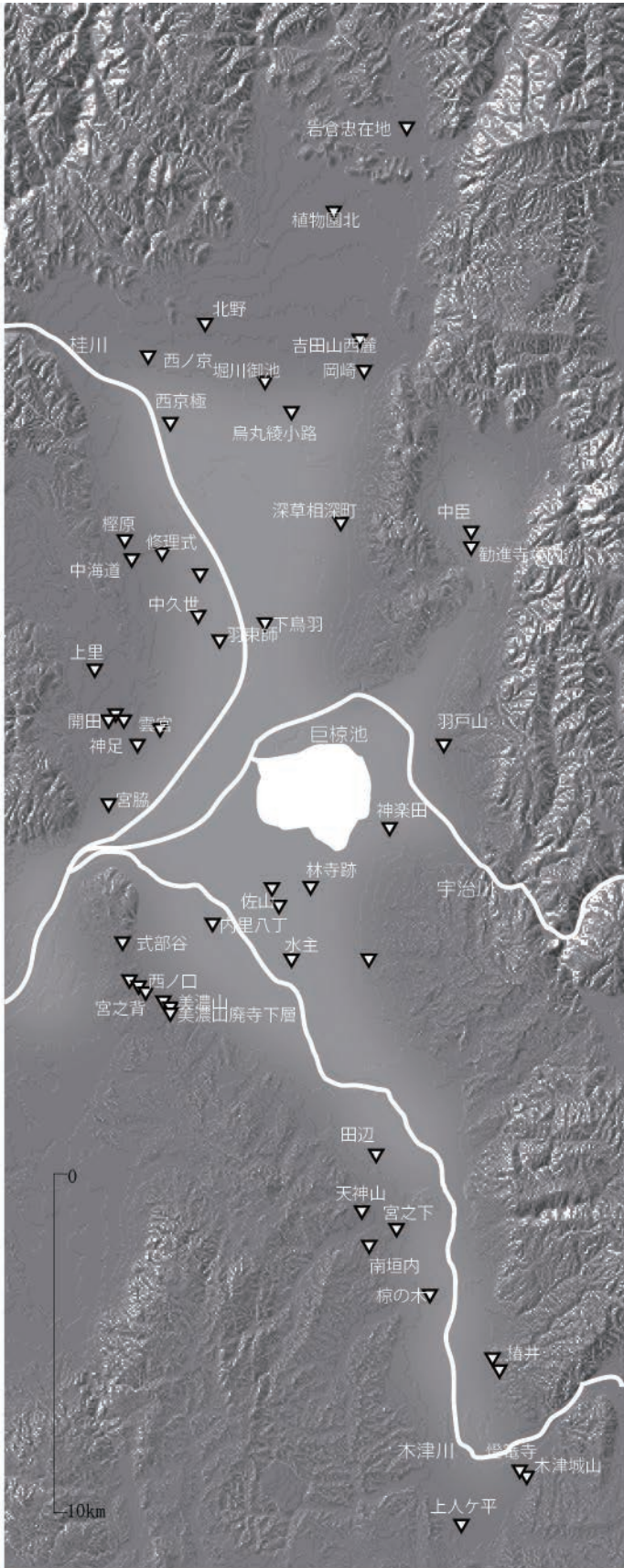


図11 京都盆地・木津川流域の弥生後期遺跡分布

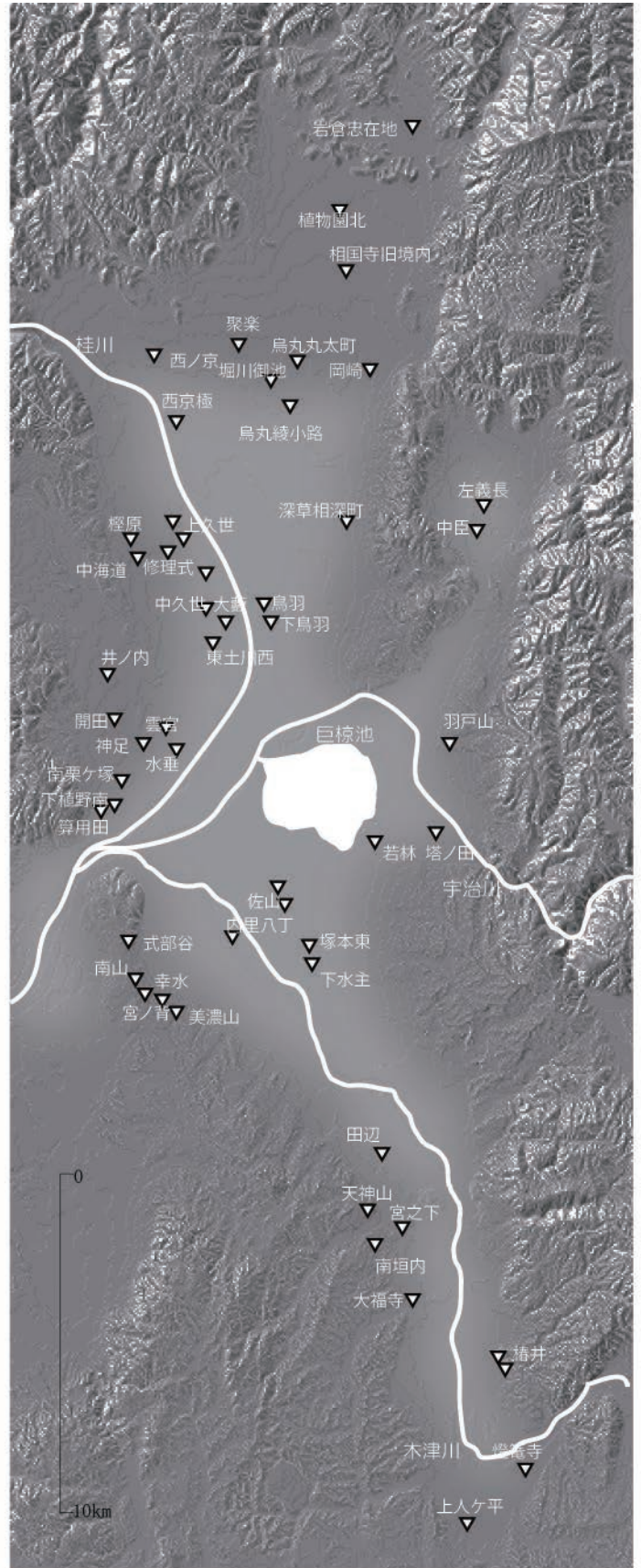


図12 京都盆地・木津川流域の庄内式併行期遺跡分布

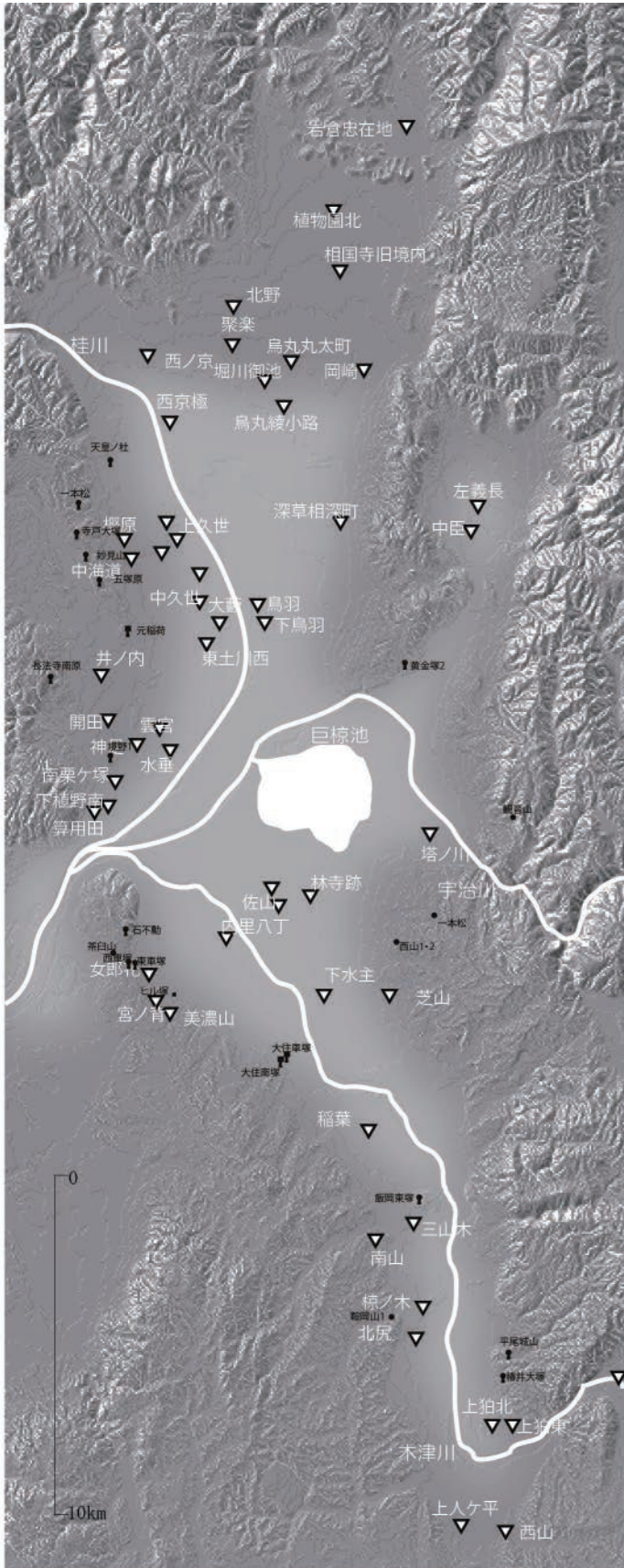


図13 京都盆地・木津川流域の古墳前期遺跡分布

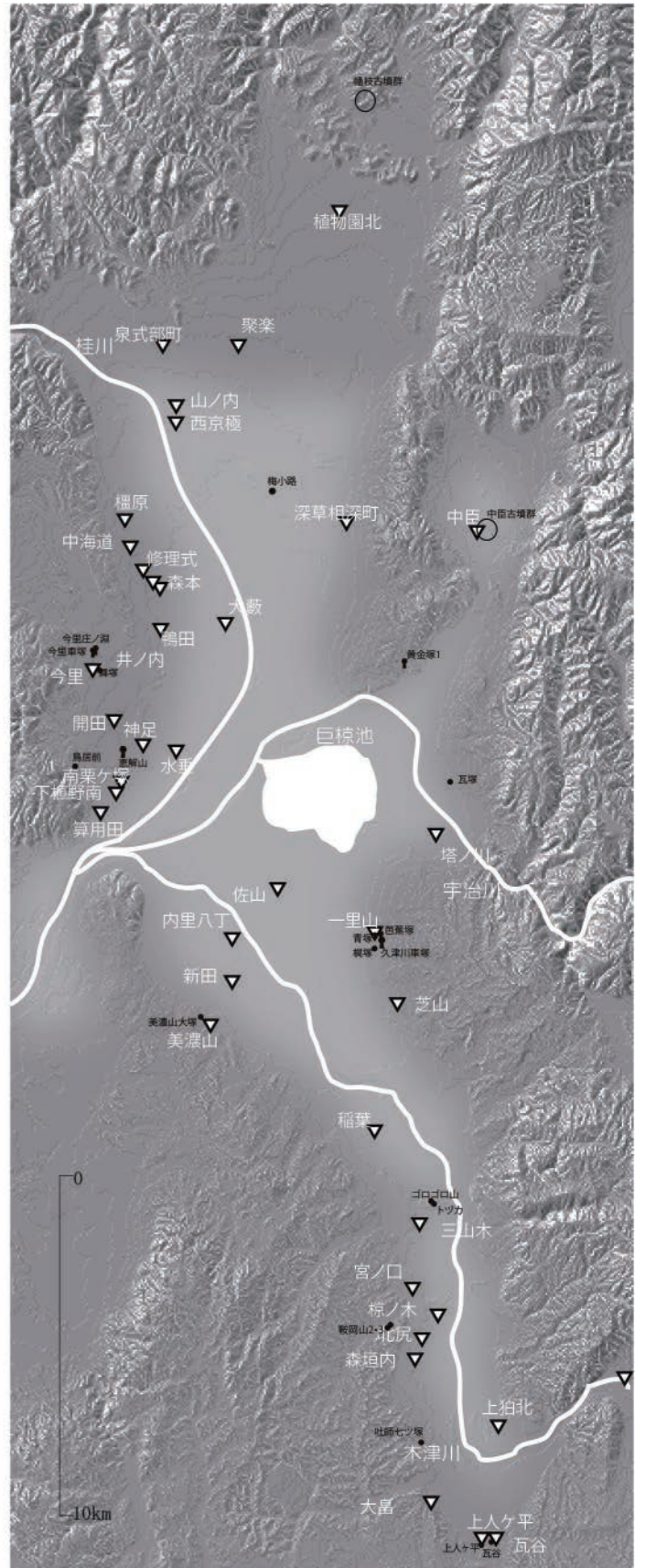
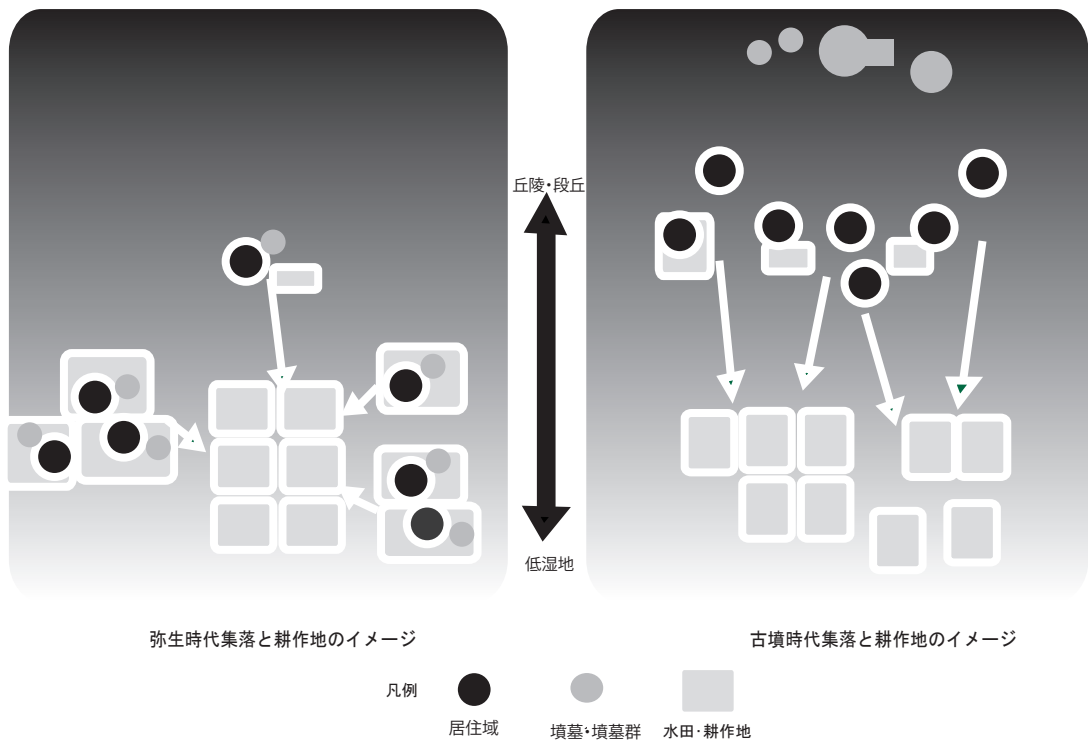


図14 京都盆地・木津川流域の古墳中期遺跡分布



図15 河内湖南岸部遺跡群と弥生時代遺構検出地点



弥生時代集落と耕作地のイメージ

古墳時代集落と耕作地のイメージ

凡例 ● 居住域 ● 墳墓・墳墓群 □ 水田・耕作地

図16 弥生～古墳時代の居住地・水田・墳墓配置モデル



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189